Base-Ball-Girl

吉村まぐろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂａｓｅ－Ｂａｌｌ－Ｇｉｒｌ

【Ｎコード】
Ｎ６７１７Ｆ

【作者名】
吉村まぐろ

【あらすじ】
のどかで平和な南の島国に、一人の少女がやってきた。彼女は転校初日、俺達にこう言った。「女子野球チームを作って、優勝する！」こうして、俺達と彼女、キノムラ・ミズホの関係は始まった。
更新は、まったくもって不定期でございます。

プロローグ

Ｂａｓｅ－Ｂａｌｌ－Ｇｉｒｌ

プロローグ

いつものように、晴れ渡った青空。ゆったり流れる、白い雲。涼しい潮風。輝く砂浜。轟くさざ波・・・うん、やっぱりいつ見ても、この海は綺麗だ。生まれてこの方十八年。ほぼ毎日のように見続けてきている海だけど、飽きるってことがない。

「また海を見ているんですか？兄さん。」

「あぁ。」

話しかけてきたのは、俺の弟、ルアーニだ。歳は十五。一見、女と見間違うような優しい奴だ。

「ここ最近、ずっとここで海を見ていませんか？それも、決まって僕が買い物に出ている時に。」

「・・・気のせいだ。」

ったく、相変わらず、よく気の付く弟だ。

「お休みだから、時間を持て余すのは分かります。でも、課題や修行があるんじゃないんですか？」

「今日のメニューはこなしたし、課題はあってないようなもんだろ？」

緩いからな、俺の学年にもなると。

「ま、それはそうなんですが・・・」

半ば諦めたような笑顔をするルアーニ。ま、いつものことだ。

「それにしても、天才魔術剣士と名高いあのクリョホーセン・ワタルが、こんな隙だらけで海を見ているなんて・・・兄さんの首を狙っている人が多いこと、忘れないでくださいよ？」

俺の横に座り、心配そうに俺を見るルアーニ。

「そんな顔するな。それにしても・・・なんだって俺の首なんかほしがるのかね・・・」

俺はそう言って、ため息をついた。クリョホーセン・ワタルとは、俺のことだ。天才魔術剣士とは、言ってしまえば俺の肩書きみたいなもんだ。この世界で、剣士なんて珍しいもんじゃない。どこにだっている。ただ、剣術を主とする剣術剣士に比べ、俺みたいに、魔術と剣術の両方を使う魔術剣士は、まだ珍しい存在だと言えるだろう。俺みたいに、十代の奴もまた然りだ。

でも、俺は決して天才じゃないことを先に言っておきたい。俺の場合、ものすごく強い師匠に鍛えられただけのこと。あの人の下で学べば、誰だって俺ぐらいにはなれる。それに、俺はまだ師匠の足元にも及ばない。なのに、師匠の三分の一くらいの懸賞金が掛かっている。懸賞金は、基本的に逃亡犯に掛かるものだ。だからって、俺が何かやらかしたわけじゃない。俺に掛けられたのは、言わば『裏の懸賞金』。裏社会の殺し屋とかが、師匠みたいな腕の立つ強者に賞金を掛け、その首を差し出せば、『裏政府』から賞金が出るという仕組みだ。で、気が付けば俺もそのリストの仲間入りを果たしていたってわけ。まったく、どこのお節介焼きがそんなことしてくれたんだか。おかげでこれまでに、十人近い殺し屋に狙われたよ。ま、どうにかこうにか返り討ちにしたけど。

「仕方ありませんよ。兄さんは、あの大魔術剣士、マクセノ・ファウストールさんの一番弟子であり、唯一の継承者なんですから。」

「継承者なんて、大層なもんじゃないよ。」

俺にはまだ、それを名乗る資格はない。俺がそう言うと、ルアーニはくすっと笑った。

「いつも、兄さんはそう言いますね。まぁ、だからこそ尊敬していたりするんですけど。」

「そらどーも。それより、買い物済んだんだろ？帰ろうぜ。」

俺がそう言って立ち上がると、

「はい。」

ルアーニは、俺の横にスッと並んだ。さて、今日の晩飯はなんだろね？・・・

第一章　異国からの来訪者

「兄さん、起きてください。今日から学校ですよ？」
眠りの中にいた俺を、ルアーニがそう言って揺さぶり起こしに来た。
「ルアーニ・・・ウソは無しだぜ・・・」
「ウソじゃありませんよ。とにかく起きてください。朝ごはん、冷めちゃいますよ？」
俺のささやかな抵抗は、あっさりとスルーされた。ルアーニはそれだけ言うと、後は俺の自己責任だとでも言いたげに、部屋を出て行った。
「・・・ったく・・・」
俺はベッドから起き上がり、着替えてリビングへと向かった。

「あ、やっと降りてきましたね。」
俺がリビングに着くと、既にルアーニは朝食を半分ほど食べていた。
「今日はトーストか・・・」
「えぇ、シャリラジャムが美味しかったので。」
シャリラっていうのは、この島の特産品のひとつ。手のひらほどの大きさがある木の実だ。そのまま食べても美味いけど、ジャムにすると、程よい甘酸っぱさが際立つ。寝ぼけた目を覚ますには充分だ。
「それにしても、今日から学校か。みんなと会うのも、なんだかんだで久しぶりだな。」
「そうですね。」
昨日まで、学校は夏休みだった。家が近所の奴は、ルアーニと買い物に行ったりするとたまに会うが、校区の端から端ぐらいになるとそう会いはしない。まぁ中には、毎日のように遊びに来ていた奴

もいたもんだけど。
「ワタルくーん！ルアーニくーん！おっはよ～！」
「・・・さて、行きますか？」
「そうですね・・・」
俺とルアーニはパンの残りを飲み込むと、カバンを持って外へと出た。
「おっはよ～！」
本日二度目の挨拶を飛ばしてきたのは、幼馴染のシュリアロ・マリアだった。

朝の陽射し。心地よいそよ風。のどかな風景。まさに田舎を絵に描いたような、そんな道を歩く三人。俺と、ルアーニと、マリアだった。マリアは、俺達の家から三軒隣に住んでいる幼馴染だ。俺と同い年だが、身長はルアーニほど。ルアーニと同い年でも、おそらく充分に通用するだろう。マリアはこの夏休みの間、ほぼ毎日、家に遊びに来ていた奴でもある。
「あ、ほらあそこ！」
不意に、マリアが向こうを指して叫んだ。どうかしたのか？
「あそこほら！スノウちゃんだよ！スノウちゃーん！」
マリアは、体を屈めながら思いっきり相手を呼んだ。呼ばれた方は、
「・・・」
無言でこちらを振り返った。アリシア・スノウ・フリミステラス。俺達のクラスメイトだ。俺達は、スノウの下へ駆け寄った。
「おはよう、スノウちゃん！」
「おはよう・・・」
スノウは、いつもの澄んだ声で返事をした。マリアよりは大きいが、決して高くない身長。白い肌にか細い体。一見、病弱な深窓の令嬢と見間違うが、体格に似合わぬ大食漢だ。スポーツ万能成績優秀の優等生でもある。口数は少ないけど、優しい性格をしている。

「おはようございます、スノウさん。」
「おっす。」
「おはよう・・・」
ホント、愛想のない奴。付き合いは長いんだけどな。それから俺達四人は、世間話をしながら学校へと向かった。

「それじゃ、また後ほど。」
ルアーニはそう言うと、下駄箱で俺達と別れた。あいつの学級は校舎の南端にある。俺達最上級生とは、ちょうど反対側だ。
俺達が通っている学校は、町外れにあるデーリントン学院だ。歴史と伝統ある木造の校舎が四つ。その中央はピロティになっていて、学園祭の会場なんかにも使われる。校舎を囲むようにグラウンドが広がり、休み時間は生徒で溢れる。校舎が四つあるのは、一学年一クラスで、計十二クラス。七歳から十八歳まで、十二学年もの子どもが集っているからだ。なぜかと言われれば、それがこの国、ステークランデル共和国の教育制度だからとしか言いようがない。
この国では、七歳から十八歳までが義務教育期間だ。その間、俺達は国民学校に通い、国語や算数みたいなことから、歴史・音楽・体育・宗教など、様々なことを学ぶ。学年は、七歳から九歳が初等科、十歳から十二歳が初等二科、十三歳から十五歳までが中等科、十六歳から十八歳までが高等科だ。まぁ、初等二科はあったりなかったり、それぞれの学校でまちまちだ。初等科が東、二科が西、中等科が南で、俺達は北だ。ルアーニと別れた俺達は、教室を目指して歩き出した。
教室に入ると、見慣れた奴らから挨拶が来る。ほとんどが、初等科の一年から知り合いの奴らばかりだ。なんだかんだで、みんなともかれこれ十二年の付き合いか。家が近所のマリアなんかはそれ以上だ。ホント、長い付き合いだよな・・・
「今日の君からは哀愁を感じるね、ワタル君。」
そう言ったのは、俺の横の席に座るフローラだ。正確にはフロラ

リア・マスノベル。クラスの委員長で、地元じゃ有名な資産家のお嬢様。こいつはこいつで、よく分かんない奴だ。どこかで、俺達とは違う思考回路をしている。でも、面倒見が良くて、男女問わず慕われやすい。クラスの女子は全員、奴のことを『フローラさん』と『さん』付けで呼んでいる。

「哀愁だ？」

俺はカバンを置きながら、フローラに聞き返した。

「あぁ。まだ秋が深まるには早いと思うぞ？」

フローラは微笑を崩さず、俺をまっすぐに見つめながらそう言った。

「哀愁なんてもんじゃねーよ。ただ、みんなとずい分、長い付き合いなんだなって思っただけだ。」

「そうだったのか。まぁ、確かに長い付き合いだ。こればっかりは、国の教育制度に感謝といったところか・・・」

少し表情を崩したフローラ。ま、いい仲間に恵まれたことは認めるよ。だからこそ、許せない奴もいるってことなんだけど。

「許せない？もしかして、夏休み前の一件のことかい？」

「他に何があんだよ？」

俺がそう言うと、フローラは少しだけ真剣な表情になった。

「あの一件は、確かにとても衝撃だった。特に、君という存在をさらに深く知った、という点ではね。」

俺を深く知る、ね・・・ま、あん時は必死だったからな。力を抑える暇がなかった。

「あの時は、本当に君に助けられた。それについては、誰もが感謝していることだろう。だが同時に、我々が本当の君を知ることになった・・・それは、少なくとも私としては、ショックだったな。」

ショック？

「本当の君を知る。それはつまり、君が今まで私達の前で仮面を被っていた、ということだ。十二年・・・とっくに仮面はないものだと思っていたからね。」

そうか・・・
「そいつは、悪いことをしたな。だけど・・・」
「私達を心配させたくなかった・・・だろ？あの時、君はそう言ってくれた。二度も同じ言葉を聞く必要はない。それに、ショックもほんの些細なもの。私はいつまでも、君の親友でいるつもりだよ。」
そう言って、フローラはまた笑った。
「・・・ありがとよ・・・」
フローラに聞こえないように、俺はそう呟いた。ホント・・・いい仲間に恵まれたよ。

『リーンゴーン！・・・リーンゴーン！・・・』
授業の始まりを告げる鐘が鳴る。それと同時に、先生が入ってきた。
「おはよ～。みんな久しぶり～。」
元気に手を振るのは、俺達の担任、ミスマルク・サレッドリア先生だ。俺達は、いつもサンディ先生って呼んでいる。歳は二十五で、ロングの黒髪が映える美人。生徒からの人気、信頼は絶大だ。
「さて、今日はみんなに大切なお話があります。分かっていると思うけど、もうみんなは最上学年。来年の三月には、この学校を卒業します。」
妙にしんみりした顔をしたかと思えば、いきなり卒業の話を始める先生。ま、実際そうなんだよな・・・来年の三月には、新しい道へそれぞれが歩き出す。この島を出ることはないだろうけど、少なくとも今までより、みんなとの関係が希薄になるのは事実だ。
「そんなわけで、今日から新しいお友達が増えます！」
「どんなわけだよ！」
俺は思わずツッコンだ。だって、脈絡がないにも程がある。なんなの？そのいきなりすぎる転校生発言は！
「なにって、そのままの意味よ？」
先生は、さも不思議そうに俺に瞳を返す。いや、そういうことじ

ゃなくて・・・
「正式な手続きを踏んでいる以上、転校自体に何の問題もないわ。だから、ワタルが心配しなくても～・・・大・丈・夫・・・」
徐々に俺に近づきながら、最後はウインクのおまけ付き。だからそういうことじゃなくて・・・
「せんせー！新しいお友達ってだ～れ！？」
マリアが、机から身を乗り出してそう叫んだ。
「そうね、あまりお待たせするのも悪いし。さっそく、入ってきてもらおっか。それじゃ、どうぞ～！」
先生がそう言った後、僅かなタイムラグを開けて、
『ガラッ』
一人の女子が、教室の扉を開けた。そしてゆっくりと、教壇に向かって歩き出す。緊張しているのか、表情がどことなく硬い。
「それじゃ、自己紹介を。」
「はい。」
俺達の視線が、表情の硬い彼女に集まる。彼女は少し間を置き、やがて、明朗な口調でこう言った。
「初めまして。私、キノムラ・ミズホと言います。イーハンから来ました。」
イーハンという言葉に、少なからず教室がざわめく。イーハンは、ここからはるか東方にある島国だ。ずい分と遠くからの転校生だな・・・
「・・・・・・」
「ん？」
押し黙ったな・・・やっぱ緊張して、次に何を言うべきか迷っているのか・・・などと、俺がのどかなことを考えた矢先だった。
「私の目的はただ一つ！女子野球チームを作って、世界を獲ることよ！」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』
彼女の叫びは、一瞬にしてクラスを不思議な空気にした。ただ一

人、
「野球チーム!?面白そうね!」
両手を叩いて喜んでいる先生を除いて。やがてミズホは、俺達にビシッと向けていた指を直すと、俺達を軽く見渡して、
「私の席はどこ?」
と、まるで何事もなかったかのように、先生に聞いたのだった。

『リーンゴーン!・・・リーンゴーン!・・・』
四時間目が終わる鐘が鳴り響き、さて、これからお待ちかねの昼休みだ。いつもなら、気の合う男友達やマリアと飯をつつく。だが、今日は少しばかり勝手が違う。
「・・・・・・」
教室の後ろの方で、転校生のミズホが険しい顔をしているからだ。例の女子野球発言があってからというもの、女子のほとんどが接し方に困っているようだ。で、同性である女子が行動を起こさないものだから、男子も自然と遠巻きになるわけで・・・やれやれ・・・妙に視線が俺に集まるな・・・俺は、ルアーニが作ってくれた弁当を片手に、ミズホに近付いた。
「よ。いっしょにどう?」
「・・・・」
ミズホは俺を見ると、
「いきなりナンパ?」
と、いたずらっぽい微笑を見せた。そんな度胸のある男じゃないよ。
「そう?かなりできるタイプに見えるけど?」
そう思ってくれたのなら、幸いだよ。で、横に座っていいかな?俺がそう言うと、ミズホは自分の右側を見て、
「どうぞ。」
と言った。俺はミズホに笑みを返し、隣に座ろうとした。だけど、
「待って!そこには私が座る!」

と、マリアが弁当片手に走ってきた。言うと思ったよ。そしてもう一人。
「ほな、ウチもいい？」
クラス一の天才的頭脳、ハイムーンド・グリーン・ヒーリルケル。俺達は、ヒーリルって呼んでいる。成績優秀で、大人しい奴だ。身長は、マリアほどにも満たないチビ。北の大国、ビッグダート王国出身。初等科三年の時、この国に移住してきた。
そして、この二人が近付いたのが良かったんだろう。クラスの奴が一人、また一人と、ミズホに話しかける。その度に、ミズホの表情は和らいでいった。そして最終的には、クラス全員で、ピロティで食事を取ることになっていた。

「それじゃみんなで、いっただきまーす！」
『いっただきまーす！』
ピロティに響く掛け声。声だけ聞けば、初等科の一年だ。だがそこにいるのは、俺達高等科の三年生。おまけでサンディ先生。ま、何かと中身はガキっぽいからな、俺達。
「わー！ミズホちゃんのお弁当、おいしそ～！」
ミズホの弁当箱を見て、マリアが甲高い声をあげる。手作り？
「ううん、お姉ちゃんが作ってくれたの。私は、あんまり料理しないから。ワタルのは？」
「俺のは、弟が作ってくれた。家事は専ら、弟に任せている。」
俺はてんでダメだからな、そういうこと。
「一つ聞いてもいいかな、ミズホ君？」
ミズホを君付けしたのは、フローラだった。
「え？」
ミズホは、少し驚いたように振り返った。
「君はさっき、ワタル君にこう言ったね。かなりできるタイプに見えると。」
「えぇ。それがどうかした？」

「いや、なぜそう思ったのか、少し引っかかってね。」
ミズホは不思議そうにフローラを見ていた。少しの沈黙の後、ミズホは口を開いた。
「なんとなく、ワタルの雰囲気に隙の無さを感じたのよ。包み込むような、優しい笑顔の裏にね。」
「ほう・・・」
フローラは、感心したようにミズホを見ていた。それは、俺としても同じなわけで。
「当ったり前だよ！なんたって、ワタル君は天才魔術剣士だもん！」
そう言ったのはマリアだ。なぜか偉そうな体勢だけど。あと、天才にアクセント付けるな。
「へぇ～・・・魔術剣士なんだ、ワタル。」
「まーね・・・って・・・」
そんなに驚かないね、ミズホ。
「まーね。私の生まれたイーハンは、世界有数の剣士の国だもの。でも、魔術剣士は珍しい方だけど。」
だろうね。そっか、イーハンは剣士の国だったっけ。うっかりしてたよ。
「ねぇ、ワタル。どうして、魔術剣士になったの？」
どうして、か・・・
「はっきり言うと、ただ憧れただけ。カッコいいなーって、子どもの頃にさ。んで、近所に強い剣士がいてさ。その人が魔術剣士だったから、俺も魔術剣士になった。それだけのことだよ。」
お師匠が剣術剣士だったら、俺もそうなっただろうし。
「そんなに強い剣士だったの？」
「マクセノ・ファウストールという方でね。腕利きの魔術剣士だったと聞く。」
フローラが俺より先に説明する。ミズホは知ってる？
「名前くらいは、聞いたことがあるわ。ということは、ワタルも強いの？」

いやそうでもない、と、俺がいつものセリフを言おうとした時だった。
「ワタル君はすっごく強いよ！なんてったって、三百万ゼラの賞金首だもん！」
マリアがこともあろうに、俺の賞金額までばらした。
「賞金首！？」
案の定、ミズホは目を見開いて俺を見た。
「それってお尋ね者ってこと！？ワタル、なにしたの！？」
「兄さんに掛かっているのは、裏の懸賞金です。」
そこへ、ルアーニがやってきて、補足説明を加えた。いつからいた？
「フローラさんが質問をしたあたりから。」
ほとんど最初じゃねーか。
「ですね。」
微笑みを浮かべるルアーニ。
「ワタル・・・誰？」
ミズホは、やや落ち着きを取り戻すと、まず、ルアーニの事を聞いてきた。
「俺の弟、ルアーニだ。ルアーニ。この人は、今日転校してきたミズホ。」
「初めまして、ミズホさん。ルアーニと申します。」
「初めまして・・・ホントに男？」
やっぱり疑うよな、ミズホ。ま、初対面の奴はだいたいそうだ。
「それはともかく、裏の懸賞金？ワタル、マジでそんなもん掛かってんの？」
ミズホの問いに、俺は首を振って答えた。
「三百万ゼラ、だっけ・・・それって、イーハンの価値でいくらぐらい？」
計算は苦手なんだ。ヒーリル、分かる？
「うん。三百万ゼラは、イーハンの価値で四百五十万エルやね。」

「よ、四百五十万エル・・・」
ミズホは、もはや叫ぶことすらなかった。ただ呆然と、俺を見ていた。やっぱ、驚いた？
「まーね・・・そんな高額、イーハンでもそういないわよ。ワタルを狙っているのは、どこの組織？」
「色々あるけど・・・一番多いのは、『黒』だね。」
「『黒』・・・裏政府と最も繋がりの深い、裏社会の中枢組織。また、厄介な所に目を付けられているのね。」
まったく。こんなどこにでもあるような首に、そんなに金かけなくてもいいと思うよ、つくづく。それにしても、
「けっこう詳しいんだね、裏のこと。」
「言ったでしょ？イーハンは剣士の国。裏社会の特集なんて、よくある話。歴史の教科書にも、基本的なことは載っているしね。割とポピュラーなのよ、裏の存在は。」
なるほど、さすがはイーハンだ。
「・・・もう一ついいかい？」
フローラが、ミズホにさらなる疑問を投げかける。
「なに？」
「君が言っていた、女子野球チームで世界を獲るという話。あれは、どこまで本気なんだい？」
「決まっているじゃない。完全完璧に本気よ。」
さっきまでの、少しいたずらっぽい笑みと違い、本気の瞳で真剣な表情をするミズホ。どうやら、マジだったらしい。
「そうか・・・君は、女子野球チームを作る、と言ったね。なぜ、今あるチームに入るという選択肢がないのかな？」
「その方が面白そうだから・・・はっきり言って、そんな理由よ。」
ミズホの表情は、文句があるならかかって来い、とでも言いたげに俺達を見ている。
「なるほど・・・本気の意思の上で、さらに楽しもうとするとは・・・中々できる事じゃないな。」

「ありがと。褒め言葉として、受け取っておくわ。」
ミズホはそう言って軽く笑うと、女子のみんなに聞いた。
「会ってすぐ、こんなお願いをするのもなんだけど・・・私は、みんなと世界を目指したい。ここにいるみんなと、世界を目指したい。だから・・・」
ミズホは深く頭を下げると、
「私と一緒に、野球をしてほしい！」
そう言ったまま、動かなくなった。少しの間、誰も行動を起こさなかった。みんな、ただジッと、頭を下げたまま微動だにしないミズホを見ている。
「・・・ワタル君。」
やっと口を開いたのはフローラだった。どうかしたか？
「チームを作るには、何人必要かな？」
フローラはそう言って、答えは分かっているねとでも言いたげな目で俺を見た・・・やっぱ、そうなるわけか・・・
「選手は最低二十五人。控えやスタッフ含めて・・・けっこうな人数になるな。ま、俺達が頑張れば、なんとかなるだろ。」
その言葉に、ミズホは少し驚きながら顔を上げた。
「ワタル・・・フローラ・・・それって・・・」
「我々は、喜んで君に協力しよう。みんなも、それでいいかな？」
フローラの問いかけに、誰しもが協賛の声を挙げた。ミズホは今にも泣きそうな笑顔で、
「ありがとう・・・」
と、言ってくれた。さて、これから忙しくなりそうだ。

第二章　作戦会議

「それじゃ、今後の方向性を決めよう。」
放課後。教室に残った俺達は、今後の方針について話し合いを始めた。議会の進行は、俺に任されている。本来なら、ミズホの仕事だとも思うけど・・・俺の方が、野球について知識が深いから、ということで。ミズホの知識はホントにごく表面的なことで、詳しいこと、重要なことをことごとく知らなかった。
そんなわけで、今回の作戦会議は、ミズホの勉強会も兼ねていたりする。
「まず、早急にやるべきことは一つ。チームとして成り立つだけの人数を揃えることだ。選手数は、一チームあたり最低二十五人。上限は特にない。そこに監督と副監督、そしてスコアラー。試合をするにあたり、最低それだけの人数がベンチにいる必要がある。」
「そこは譲れないのね？」
「あぁ。」
ミズホの質問に、最低限の応答で答える俺。それにしても、ミズホの目は本当に真剣だな。他の女子もそれは同じ。応援要員の男子は、やる気と眠気が半々ぐらいか？
「スコアラーと選手は兼任できるの？」
「それはダメだ。スコアラーは、それ専門でないといけない。」
「そう・・・そのスコアラーに資格は？」
「これといって無い。記録をしっかり取れさえすれば、基本的にはＯＫだ。」
もっとも、資格が無いといっても、ちょっとやそっとで出来ることでもないんだけど。
「とにかく、急を要するのは人数集めだ。このクラスの女子は、ミズホを含め十六人。選手だけで後九人、チームとして必要だ。」
「ワタル君、監督とかは？」

マリアが手を挙げて質問する。
「監督と副監督に関しては、俺に心当たりがある。それよりも、まずは選手だ。誰か、助っ人に心当たりのある奴はいないか？」
俺の質問に、一瞬の間を置いて、
「ある。」
そんな静かな声が響いた。発言者はスノウだ。
「私の姉ならば、協力する可能性が高い。」
「スノウの・・・あぁ、ミーフィーさんか。」
スノウの姉であるミーフィーさんは、俺達と二つ違いの人だ。何度か会ったことがあるけど、スノウと性格が百八十度違う人だった。
「姉には、私の方から話をしてみる。」
「分かった。そっちはスノウに任せよう。他にいないか？」
「それなら、私も。」
そう言って手を挙げたのは、ミズホだった。
「言い忘れていたんだけど、お姉ちゃんも、選手として協力してくれるらしいの。その内、みんなにも紹介することになると思うけど。」
「それは確定済みなのか？」
「えぇ。」
となると・・・助っ人は八人でいい計算になるな。ミーフィーさんが協力する可能性も考えれば、七人・・・
「私にも心当たりがある。」
ホントか、フローラ？
「あぁ。みんなも知っているかと思うが、エドさんだ。」
エド・・・って・・・
「それって、エド・クライソアさん？」
「ご名答だよ、マリア君。わが町一番の美人である、あのエドさんだ。あの人とは旧知の仲でね。説得には私が当たろう。」
「大丈夫なの？」
ミズホが、不安そうにフローラを見る。大丈夫だよ。

「どうして？」
「フローラは、出来ないことを出来るとは言わないからさ。」
今までそういう奴だったからな、フローラは。今回も、きっと大丈夫だろう。
「そう・・・じゃあ、その人については任せるわよ、フローラ。」
「心得た。」
フローラは、いつもの自信に溢れた笑顔でそう言った。にしても、けっこうみんな、助っ人に心当たりがあるんだな。この分なら意外と・・・
っていうのはやっぱ楽観的で、それ以降、誰からも手は挙がらなかった。スノウ達の話がうまくいったと仮定して、それでもあと六人か・・・こりゃ、思ったより大変かもな。

その日の帰り道。俺は、ミズホと一緒だった。やましい目的があるわけじゃない。みんなより一足先に、ミズホのお姉さんとやらに会っておくためだ。ミズホの口ぶりからして、お姉さんはかなりの理解者に違いない。なにせ、
「私のわがままに付き合ってくれたから。」
と、ミズホが少し照れくさそうに言ったからだ。ミズホのお姉さん話に付き合うこと数分。
「着いたわ、ここよ。」
この地方ではごくありふれた、レンガ式の一戸建てがそこにあった。ここがミズホの家か。俺の家からは歩いて十分、って所か。
俺はリビングに通された。そこには、イーハン伝統の木製家具が、デザイナーが設計したかのような配置で佇んでいた。
「座ってて。今、お姉ちゃんを呼んでくるわ。」
ミズホはそう言って、リビングを出た。
それにしても、この部屋はなんだか落ち着くな。イーハンの伝統、とでもいうべきか。この木の椅子も、独特の暖かみがある。このまま、ここで昼寝も出来そうだな。そう思って、俺が目を閉じた時だ

った。
「その椅子、気に入った？」
そんな声が聞こえた。声のした方を向くと、俺を優しい笑顔で見つめるミズホが・・・いや、ミズホじゃない。顔も声もそっくりだけど・・・ミズホよりデカイ。
「あなたが、ワタル君ね。初めまして。姉の、キノムラ・マリよ。」
そう言って、マリさんは俺に握手を求めた。その手を握り返す時、俺は、マリさんの顔をまともに見ることが出来なかった。

「まずは、お礼を言わせてちょうだい。私達のわがままに付き合ってくれること、本当に感謝しているわ。」
ミズホが飲み物を置いた後、マリさんはそう言って微笑んだ。
「いえ、そんな・・・お礼を言われることじゃありません。ミズホが真剣だったから、俺達も協力しようってことになっただけです。」
「その気持ちが嬉しいのよ。会って間もないミズホの話を聞いて、そういう気持ちになってくれたことが。」
マリさんは、優しい笑顔でそう言ってくれた。見た目はミズホとほとんど変わらないのに、その笑顔からは、成熟した大人の雰囲気を感じざるを得なかった。なんだか、ミズホがマリさんを大好きな気持ちが、よく分かるな。
それから俺達三人は、これからのことについて話し合った。最大の問題である選手集めに関しては、俺に一任されることになった。その他のスタッフも、必要とあらば順次集めていくことも。マリさん達は、この国に来てまだ日も浅い。そういった人事関係は、俺達が専門になって然るべきだろう。
あと、練習施設とかいった問題は、並行して進めていくことになった。こりゃ、クラス内で役割分担が必要だな。
「それじゃ、色々とお願いね、ワタル君。」
「分かりました。」
俺はマリさんに、ある程度自信を込めた笑顔でそう言った。これ

は、マリさん達を安心させると同時に、自分に言い聞かせるためでもあった。けっこう責任重大だからな。ある程度、自分にプレッシャー掛けとかないと。
「ところで、ワタル君は魔術剣士なのよね？」
マリさんが、不意にそんなことを聞いてきた。ミズホにでも聞いたのかな？
「えぇ、そうですが？」
「・・・実は、私も少し魔術が使えるの。もっとも、日常生活の補助程度にだけど。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
まぁ、一瞬絶句したくなるよな。ということは・・・
「マリさんは、魔法使いなんですか？」
「一応、ライセンスは持っているわ。もっとも、C級だけどね。」
C級か・・・下から二番目だな・・・
この世界において、魔法使いは確立された職業で、その業務は多岐に渡る。マリさんの持っているC級は、一般レベルの魔法使いだ。
「日常の補助ってことは、活性魔法ですか？」
「えぇ。ワタル君は、ライセンス何級？」
「一応、A級の資格を持っています。師匠にみっちり叩き込まれたおかげで、三浪ですみました。」
「三浪でA級！？へぇ～～・・・」
マリさんは、感心したような目で俺を眺めた後、自嘲気味な表情でこう言った。
「天才は違うわね・・・」
天才、か・・・そう言うのは、いっつも周りの人だけだ。お師匠は、一度も俺を天才だとは言わなかった。それが嬉しくもあり、悔しくもあった。
「ねぇ、ワタル君。失礼かも知れないけれど、ちょっと、魔法を見せてくれる？」
「魔法を？」

「えぇ。A級の魔法がどんなものか、一度見てみたいの。」
マリさんの目は、まるでプレゼントを心待ちにしている子供のような目だった。そしてそれは、黙って話を聞いていたミズホも同じなわけで・・・
「いいですよ。」
俺の返答に、二人の目の輝きがいっそう増したのは言うまでも無い。

マリさんの家には、小さい庭のようなスペースがある。俺とマリさん、ミズホの三人は、そのスペースに出てきていた。
「さて、どの魔法をお見せしましょうか？」
俺の問いに、マリさんは即答した。
「できれば、召喚魔術をお願いしたいわ。」
「召喚魔術？」
俺は思わず聞き返した。
「できないの？」
「いや、むしろ得意な方ですけど・・・」
召喚魔術は難易度高いけど、俺はなぜか昔からよく出来た。
「でも、どうして？」
「なんだか、いちばん魔術って感じがするじゃない？私はC級だから、とても出来ないけど。だったら、せめてこの目で見てみたいな～って。」
「なるほど・・・」
分かりやすい理由だな。ミズホも、召喚魔術でいいかい？
「えぇ、いいわ。」
了解。んじゃ、始めますか。
二人が見つめる中、俺は剣を抜いた。いつも背負っている愛刀を少し眺めた後、俺はそれを地面に突き刺した。そして神経を研ぎ澄まし、呪文を唱える。
『地獄の淵で眠りし獣よ・・・我の声が聞こえたならば目覚め、我

の下へと来やれ・・・召喚・・・バルディオール！』
俺の叫びと、
『グオォォォォ！』
召喚獣、バルディオールの叫びは、完全に共鳴した。近所迷惑にならないよう、防音兼ねた結界張って正解だな。
「久しぶりだな、バルディオール。」
「グゥゥ・・・」
バルディオールは、その赤い体を丸めて俺の横に座る。それにしても、少し見ない間にまた大きくなったか？お前、成長期が止まることとか無いわけ？
「グル？」
いや、なんでもない。それより、
「どうです？お二人さん？」
「はぁ～・・・」
俺の問いに、マリさんはただ呆けた声で答え、
「・・・・」
ミズホは無言でバルディオールを見つめていた。
「ル？」
ミズホの視線に気づいたのか、バルディオールはミズホ達を見た。
刹那、ミズホとマリさんの肩がビクッと震えた。
「怖がらなくて大丈夫。バルディオールは、優しい奴だよ。」
「こ、怖がってなんかいないわよ。」
ミズホは、引きつった笑顔で強がって見せた。心なしか、マリさんも虚勢を張っているように見える。
「その割には、二人とも左足が半歩後ろ。」
俺がそう言うと、二人は同時に自分の左足を見た。人は恐怖を感じると、無意識の内に距離を取りたがる。ま、左足が下がるのは、投手の職業病だろうね。
「ホントに大丈夫だって。試しに触ってみなよ。」
「ホ、ホントに大丈夫？・・・」

マリさんが、そう言いながらゆっくりと近付いてきた。ミズホも、少し遅れながら付いていく。二人から視線をそらさないバルディオール。つられて、二人もバルディオールを見つめている。そして、バルディオールの鼻先に来たマリさんは、
「ジッとしててね・・・」
そう言って、おそるおそるバルディオールの鼻を触った。刹那、
「ルルル・・・」
バルディオールは気持ち良さそうに目を閉じた。どうやら、バルディオールは二人を信頼したみたいだ。
「ね、怖くないでしょ？」
「・・・えぇ。」
恐怖心の無くなった二人は、その後、バルディオールを触ったり背中に乗ったりと、ひとしきり遊んでいた。

「ただいま～。」
ミズホの家から帰ってきた時、既に日は沈みかけていた。俺が玄関を開けると、
「遅かったですね。」
エプロン姿のルアーニが出迎えてくれた。わりーな、連絡もなしで。
「まったくです。ま、ご飯が冷める前だったので、良しとしますけど。それで、どちらへ？」
「ミズホの家だ。みんなより一足先に、ミズホの姉ちゃんに会ってきたよ。」
リビングに入ると、そこでは夕食が湯気を立てていた。今日は海老のスープか。
「どんな方でした？ミズホさんのお姉さん。」
「名前はマリさん。見た目は、ミズホの顔のまま、他の部分を大きくした美人だ。魔法のC級ライセンスを持っている。落ち着いた、大人の女性だよ。」

「そうですか。」
席に着く、俺とルアーニ。
「どんな話を？」
「簡単な打ち合わせみたいなもんだ。とりあえず、諸々の問題を俺が中心で引き受けることになった。明日、クラスのみんなで話し合って、役割分担でもするよ。」
そうでもしないと、俺一人じゃさすがにきついからな。
「お前にも、色々と動いてもらうと思う。よろしく頼むな。」
「だと思っていました。任せてください。これでも、人脈には自信があるつもりです。」
期待させてもらうよ。あと、人脈で期待できそうなのはフローラぐらいか・・・
そういや、フローラとスノウ、説得はうまくいったかな？ミーフィーさんは可能性高いとして、エドさんは微妙だな・・・ま、明日にははっきりすることか・・・
んで、あっという間に翌日の教室。俺は早速、フローラとスノウに話を聞いた。
「どうだった？スノウ。」
「姉は、協力を惜しまないと約束してくれた。」
「そうか。」
思わず、俺は安堵の声を漏らした。可能性が高いとはいえ、完全じゃない。どこかでは不安だった。
「ただ・・・」
「ん？」
なんか問題あんのか？
「姉が、あなたから詳しい話を聞きたいと言っていた。時間はいつでも構わないから、私の家へ来てほしい。」
「あぁ、分かった。」
詳しい話ね・・・詳しいこと、まだほとんど決まってないけど、

まいいか。
「フローラの方は？」
「残念ながら、昨日はエドさんと会えなくてね。今日、改めて訪ねてみるよ。」
「よろしく頼む。」
そう言うと、フローラは不敵な笑みを浮かべて席に着いた。どうせ、エドさんをうまいことチームに入れる手段でも考えているんだろう。あいつの話術と手段はえげつないからな。こと、人を丸め込むっていう点では特に。
「さて、それじゃ今日の本題だ。」
俺は全員を見渡してから、話を始めた。
「俺は昨日、ミズホの家に行って、ミズホのお姉さんであるマリさんと会ってきた。話し合いの結果、人事その他諸々、チームを作る上で必要な問題の解決策は、俺に一任されることになった。まぁ、任されたからには、精一杯やるつもりだ。もっとも、俺一人じゃどうしようもないだろうから、みんなの協力は不可欠だ。よろしく頼む。」
「はーい！」
返事をくれたのはマリアだけ。でも、みんなの表情はやる気に満ちている。言わずもがな、ってやつか。
「せやけど、基本的には何を手伝ったらエエの？」
ヒーリルが顎に手を当てて聞いてくる。
「当面は、チームに必要なスタッフ集めが必須事項。選手はもちろん、監督にスコアラー、応援団や各種コーチに裏方・・・挙げていけばキリが無い。」
「そ、そんなにいるん！？」
ヒーリルが目を丸くする。ま、無理もないか。選手だけでも足りなくてピンチだってのに、そこに裏方だのなんだのと言われれば。だけど、
「球団っていうのは、そういう人達が支えているんだ。選手や監督

だけが全てじゃない。裏でチームを支えている人達こそ、むしろ重要。そしてそういう人達がいるから、選手も頑張れるってわけさ。」
と、どっかのえらい野球人さんが言っていたんだけど。
「とまぁそういうわけだから、まずは人数集めを最優先で進める。その際に、ミズホ。」
「なに？」
最前列で話を聞いていたミズホは、俺に名前を呼ばれて少し驚きながら返答した。
「チーム作りの言い出しっぺであるミズホには、人数集めに付き合ってもらうよ。言い出しっぺが誠意を見せれば、相手も首を縦に振ってくれるってもんさ。」
「それくらい、お安い御用よ。私にドーンと任せなさい！」
ミズホはそう言って胸を張った。ま、期待させてもらうよ。
「ワタル君、少しいいかい？」
手を挙げたのはフローラだ。どうした？
「君は昨日、監督と副監督に関しては心当たりがある、と言っていたね。できれば、それが誰なのか教えてほしい。」
あぁ、そのことか。できれば、選手が揃ってから交渉したかったんだが・・・ま、いいか。
「分かった、教えるよ。まず監督だけど、ニールセンさんに頼もうと思っている。」
「ニールセン？誰それ？」
ミズホが首を傾げる。あれ？知らない？
「知らないわよ。」
「そっか・・・じゃあ、こう言えば分かるか？Ｎ・Ｎ。」
「Ｎ・Ｎ・・・！」
ミズホの表情が変わった。やっぱ、そっちの方が知名度あるわけか。
「ワタル、Ｎ・Ｎってまさか？」
「そ。イーハン男子プロ野球界で三年間プレー。三年連続三冠王な

がら、突然の引退。まさに伝説のバッターと名高いN・N。それが俺の監督候補、ニールセン・ニルヤさんだ。」
「あの人って、この島に住んでるの？」
「あぁ。というか、この島がニールセンさんの生まれ故郷なんだ。今は、島の南端で奥さんと暮らしている。」
おしどり夫婦で有名なんだよな。
「あの人なら、監督としては申し分ないよ。もっとも、受けてくれればの話だけど。」
「ま、それはワタルの交渉術次第って所ね。」
先生が横で楽しそうに笑っている。他人事みたいに言わないでよ、先生。
「副監督は、先生もよく知っているあの人に頼もうかと思っているんだからさ。」
「あの人？」
先生は首を傾げた。俺は少しの間を置いて、その名を告げた。
「ジーニスさんだよ。」
「！」
瞬間、先生は目を丸くし、その顔はみるみる紅潮していった。
「？誰なの？」
今度はミズホが首を傾げた。ジーニスさんってのは、
「あぁだめ！」
言おうとした瞬間、先生は見事なダッシュで俺の口を塞いだ。それと同時に、
「ジーニスさんは、先生が片思いをしている方だ。中々の好青年でね、島内でも評判がいい。」
フローラが明朗な口調で答えを告げる。
「へぇ～、けっこう可愛い所あるんだ、サンディ先生。」
ミズホの笑顔は、いつもより悪戯っぽかった。
「もう！なんで言うのよ、フローラ！」
先生は眉をしかめ、フローラに文句を言った。

「ハハハ、黙っていてもいずれ知れることです。ですが、先生もそろそろ勝負に出られた方がよろしいかと。」
「しょ、勝負？」
「そうだよ先生！」
突然、マリアが立ち上がった。
「ジーニスさんは、すっごくカッコよくて人気があるんだよ！先生から行かなきゃ、他の人にすぐ取られちゃうよ！」
「で、でも・・・」
今度は俯き始める先生。まったく・・・この話になると、コロコロ表情が変わっていくな。ま、普段からよく顔に出るけど。
「そ、それよりもワタル！なんだって副監督がジーニスさんなのよ？」
先生は俺の拘束を解くと、耳元でそう叫んできた。話題そらしたね。
「ジーニスさんは、ニールセンさんと旧知の仲であると同時に、かなりの野球通。加えて、冷静な状況分析能力を持っている。少なくとも、理論はしっかり持っている人だよ。」
それになにより、
「ジーニスさんは、奥さん以外で唯一、ニールセンさんをコントロールできる人だ。言い換えれば、ジーニスさんなくしてニールセンさんなし。このコンビなら、間違いなくチームをいい方向に導いてくれる。」
「なるほど。君が言うなら、説得感満載というものだ。」
そう言ったフローラを筆頭に、女子のみんながウンウンと頷いてくれる。よし、決まりだな。
「二人の説得には、俺が当たる。その間、みんなには他の仕事を頼みたい。」
「他の仕事？」
ヒーリルが首を傾げる。説明するよ。
「フローラは、引き続きエドさんの説得に当たってくれ。」

「承知した。」
「他のみんなも、まずは助っ人探しに尽力してほしい。裏方関係は、ウチのルアーニも動いてくれている。」
あいつの人脈は広いからな。
「必要とあらば、俺やミズホに声をかけてくれ。特に、ミズホは問答無用で連れ回したって構わないはずだ。そうだよな？ミズホ。」
「当ったり前よ！ドーンと任せなさいってんだ！」
ミズホは胸を張り、高らかにそう宣言した。どこから湧く自信か知らないけど、頼もしいよ。
その日の作戦会議はそれで終了した。みんなは終了を聞くなり、慌しく教室を出て行った。やる気があって助かるね。さて、ミズホ。
「スノウの家に行くよ。」
「分かってるって。じゃ、スノウ。案内してちょうだい。」
スノウは無言で頷くと、カバンを持って歩き出した。俺とミズホもそれに続き、教室を出た。

学校を出てから十五分ほど後。俺とミズホは、スノウの家のリビングにいた。斜め横にはスノウが座っていて、正面では、
「いやーはっはっはっはっは！」
スノウの姉、ミーフィーさんこと、アリシア・ミトフィーユ・フリミステラスさんが高笑いしていた。相変わらず、テンションの高い人だな。
「いやー、スノウから話を聞いた時は驚いたよ！まさか私に、野球の助っ人なんて就職先が来るなんて、思ってもみなくてさ！」
大きな口をこれでもかというくらい開けて、平均よりワンランク上のボリュームで喋るミーフィーさん。
「しかも、ワタル君が立ち上げた新球団だって言うじゃないか！いやー、長生きしてみるもんだわさ！はっはっはっはっは！」
「いや、俺が立ち上げたわけじゃないんですけど・・・」
とは言ってみたものの・・・この高笑いの中じゃ、聞こえている

はずもないか。あと、歳はそう違わないから、長生きしたとか自分で言わないでください。
「んで、わたしゃ何をすればいいんだい？」
「それは、これから決めます。なにせ、まだ人員が揃っていないもんですから。」
「おやおや、そうなのかい？そいつは大変そうだね。」
大変そうと言いながら、なんだか楽しそうな表情だ。そういえば、ミーフィーさんが泣いているとことか困ったとこ、見たことない気がするな。
「私以外、人員の当てはあるのかな？」
「フローラが、エドさんを説得してくれるそうです。あと、監督をニールセンさんに、副監督をジーニスさんにお願いするつもりです。」
「ほっほう～・・・この島の美男美女が勢ぞろいだね～。」
まぁ、そうなりますね。
「でもでも、それだと全然足りないのではないのかい？」
「えぇ。なので、クラスのみんなやルアーニが動いてくれています。俺も、出来るだけやってみますよ。もっとも、女性の知り合いとなると、あまり多くはありませんが。」
「おやおや、それは意外だね。」
意外？どういうことです？
「私が方々から聞く噂では、ワタル君はかなりのプレイボーイなんだけどな？」
「なら、それは誤報ですね。」
俺がプレイボーイなんて、こりゃまたずい分な話だな。
「そうなのかい？そいつは残念だ。」
「残念？」
どういうことですか？
「いやいや、どうせならね・・・私もワタル君の数多いお嫁さん候補にでもなっておこうかと思っていたのさ。なにせ、お姉さんも寂

しいお年頃だからね～！はっはっはっはっは！」
「あ・・・・えと・・・・・・」
俺は、次に続けるべき言葉が見つからなかった。最後は豪快に笑ってくれたものの、俺としては聞き逃せるわけでもなく・・・
「とまぁ、それは冗談として。」
「冗談ですか！？」
またも突っ込んでしまった俺。心臓に悪い冗談はやめてください、ミーフィーさん。
「あっはっは！ごめんごめん・・・ワタル君、助っ人はまだまだ必要なんだろ？」
「え、えぇ、まぁ。」
ミーフィーさんの表情が、少しだけ真剣になった。なんだろ？
「一人、協力してくれそうな女の子、知ってるよ。」
「ホント、ミーフィーさん？」
俺より先に、ミズホが聞き返した。いや、俺としても、思わず前のめりになる話だ。誰なんです？
「ポーラだよ。ワタル君もご存知のね。」
ポーラ・・・
「ポーラ・レインハルトさんですか？」
「ピンポーン！あの子、あぁ見えて野球好きだし、真面目だしね。ワタル君の頼みとあらば、そうそう断りはしないと思うけどな。」
「ポーラさんか・・・」
少しだけ、意外な名前だった。まぁ、ポーラさんとミーフィーさんは同い年だから、面識はあるんだろうけど。
「ま、当たってみてちょ。他にも、私から声をかけてみるよ。特に、暇そうなの中心にね。」
「お願いします。」
ミズホが頭を下げる。俺も、つられて無言で頭を下げた。さて、次はポーラさんかな。

スノウの家を出た俺とミズホは、ポーラさんの家に向かって歩き出した。あんまり行ったことないからうろ覚えだけど、ま、なんとかなるだろ。
「ねぇ、ワタル。ポーラさんって、どんな人なの？」
家を出て数分。案の定、ミズホから予想していた質問が来た。
「ま、一言で言っちゃうと無口な人かな。でも、とっつきにくいとか、そういった感じはないよ。」
俺も、会ってすぐ友達って感じになったし。
「ま、聞き上手な人だし、ミズホも、きっとすぐに友達になれると思うよ。」
「そう。」
ミズホの表情は、どことなく緊張しているようだった。誰しも、初対面はさすがに緊張するってことか。
スノウの家を出て十分ほど。途中、幾度か道を間違えながらも、俺達はなんとかポーラさんの家に着いた。レンガ調ではなく、わらぶき屋根の木造建築。冬でも何かと温暖なこの国では、よくあるタイプの家だ。
『コンコン』
ミズホが扉をノックすると、
「はーい。」
返答と同時に扉が開いた。出てきたのは、ポーラさんの弟のパーシュさんだった。頭の回転の速いやんちゃな人だ。
「あ、ワタル。こんにちは。」
俺はパーシュさんに挨拶を返すと、ミズホにパーシュさんを、パーシュさんにミズホを紹介した。
「それでパーシュさん。今日は、ポーラさんに会いに来たんだけど。」
「姉さんに？姉さんなら、今は集会所だと思うよ？」
「集会所か・・・」
弱ったな。港の方まで出なきゃいけない。

「いつ出かけました？」
「三十分くらい前かな。しばらく、帰ってこないと思うけど。」
「ですよね・・・」
しゃーない。こっちから出向くか。
「んじゃ、ちょっくら集会所まで行ってみますよ。ミズホに、向こうの方を見せるついでにね。」
「悪いね。」
パーシュさんは、軽く謝ってから扉を閉めた。俺は、前の歩道で刀を抜き、地面に突き刺した。
「ワタル？」
ミズホが、不思議そうにこっちを振り返る。
「ちょっと離れて。」
「うん・・・」
ミズホは、期待と不安の混じった目で俺を見ながら、少しだけ後ずさりした。
『天界で眠りし獣よ・・・我の声が聞こえたならば目覚め、その翼を羽ばたかせ、我の下へ来やれ・・・召喚・・・シルフォン！』
俺がそう叫ぶと、ゆっくりと上から光が差し込んできた。やがて、
『ヒヒィィィン！！』
甲高く、それでいて澄んだ声が響いてきた。その声の主、シルフォンは、俺とミズホの間にゆっくりと降り立った。その芦毛の馬体と、大きく広がる翼は雄大かつ格式高い。
「綺麗ね・・・」
ミズホは、口を小さく開けながらそう言った。
「それにしても、さすが魔法ね。天馬まで呼び出せるなんて。」
「まぁね。シルフォンは、この国では神よりの使いとして、様々な神話や伝説に登場する動物。俺も、こいつの召喚に成功した時は心震えたよ。」
なんか、バルディオールを召喚した時とは違う感情だったな。さて、

「乗ってよ、ミズホ。」
「乗るって、空を飛ぶの？私・・・高い所はちょっと・・・」
高所恐怖症か。
「なら、走って行くよ。なんせ、集会所のある港までは、歩いていたら日が暮れちゃうからね。」
俺はそう言って、シルフォンの上から手を伸ばした。ミズホはその手を掴んだ。俺はミズホを後ろに乗せると、
「しっかり掴まってなよ。」
そう声をかけて、シルフォンを走らせた。軽快な足音と共に、俺達は港を目指した。

港は、いつものように賑わっていた。時間帯が夕方に近いこともあり、特に買い物客で賑わっている。港の少し前でシルフォンから降り、シルフォンを元の世界に返した後、俺とミズホは集会所を目指した。
集会所は、港の一角にある小高いビルのことだ。様々な施設が入っていて、何かと人気の遊び場だけど・・・
「さて、ポーラさんはどの部屋にいるのやら・・・」
パーシュさんに、うっかり聞きそびれたな。
「どうするの？」
ミズホが、怪訝そうに俺を見る。
「とりあえず、しらみつぶしに当たってみよう。ミズホの案内も兼ねてね。」
俺はそう言って、集会所の中に入った。ミズホが後に続く。
一階には、ビリヤード場と卓球場がある。けっこう本格的なんだけど・・・
「ここにはいないか・・・」
ポーラさんの姿はない。続いて二階、三階と探してみるけれど・・・いないな。
「ちょっとワタル。いないじゃないの。」

「となると・・・後は四階だけか・・・」
四階にあるのは、確か・・・
「碁会所と将棋館か・・・」
どっちかといえば、年配の人が多いイメージだな。
「へぇ～・・・こんなとこで碁や将棋ができるのね？」
「あぁ。」
そういえば、二つともイーハンじゃメジャーなんだっけ？
「えぇ。それこそ、お年寄りから小さい子どもまで大人気。それを題材にした本とかドラマとかもあるし。」
「へぇ～。」
さっすがイーハンだな。さて、将棋館の方から見てみるか。俺は、将棋館へと続く扉を開けた。
扉を開けた先には、靴置き場がある。なんでも、本場イーハンの将棋会場の全ては土足厳禁らしい。ここで靴を脱ぎ、スリッパとかを履くこともないらしい。俺とミズホは靴を脱ぎ、それを下駄箱に入れて部屋に入った。
ふすまを開けた先は、一面畳敷きの部屋だ。設計した人がディテールにかなりこだわったらしく、本場イーハンの雰囲気そのままらしい。
「へぇ～、本格的じゃない。」
ミズホがこう言うってことは、相当本場に近いんだろう。さて、ポーラさんは・・・
「あ、いた・・・」
ポーラさんは、窓際の席で陽の光を浴びながら、静かに正座していた。目の前には中年の男性。対局中か・・・俺とミズホは、少し遠くから、それでいて、盤面が見渡せる場所で見ていた。
見た感じ、おじさんの方がだいぶ苦戦しているようだ。盤面をジッと見ながら、腕を組んで考え込んでいる。一方で、ポーラさんは微動だにしない。ジッと、おじさんの少しはげた頭を見つめている。その目は凍てつくように鋭い。

「・・・ありません。」
おじさんが、少しうな垂れながら負けを認める。ポーラさんは無言のまま、頭を下げた。
「やるわね。」
ミズホが、勝負が終わると同時にポーラさんに話しかけた。ポーラさんが、視線をこっちに向ける。さっきまでの凍てつくような視線と違って、少し驚いたように目を見開いている。
「お久しぶりです、ポーラさん。ワタルです。」
ポーラさんは俺を見ると、軽く会釈した。どうやら、俺のことは覚えてくれていたらしい。
「こっちはミズホ。つい最近、この町に越してきたんです。」
「・・・」
ポーラさんはミズホを見上げた。そしてゆっくりと立ち上がり、
「ポーラ・レインハルト。」
ごく簡単な自己紹介をした後、握手を求めるように手を出した。
「あ、キノムラ・ミズホです。初めまして。」
ミズホは手を握り返した。ところでミズホ。どうやら、ポーラさんの勝ちみたいなんだけど？
「えぇ。途中の経過を一切見ていないからなんとも言えないけど、この詰み・・・玉が右へ出れば香車、下なら飛車、左なら銀、前には逃げ道なし・・・かっちり詰んでいるわ。一方で、ポーラさんは穴熊で固めたって感じね。違う？」
何のことだかよく分からないけど、ポーラさんが頷いているあたり、どうやら当たっているみたいだ。ミズホは詳しいんだね、将棋。
「ま、それなりにね。」
ミズホは、心なしか誇らしげに見えた。さて、本題と行こうかな。
「ポーラさん。今日は、折り入って頼みがあって来たんですが・・・時間、あります？」
そう聞くと、ポーラさんはコクッと頷いた。ここで話すのもなんだしと、俺達三人は休憩所に降りた。

休憩所で一息をつくポーラさん。俺とミズホは、選手としてチームに参加してほしい旨を伝えた。
「なぜ、私？」
「ミーフィーさんの推薦です。ポーラさんなら、きっと力になってくれるって。」
俺の言葉に、ポーラさんはまた少し目を丸くした。おそらく、ミーフィーさんの推薦、というのが引っかかったんだろう。
「返事はすぐじゃなくても構いません。でも、私達が本気だってことは、事実です。」
ミズホが、少しだけ前のめりになりながらそう言った。その言葉を聞いたポーラさんはコクリと頷き、
「時間がほしい・・・」
と言った。まぁ、むしろこれが普通の反応だろう。ミーフィーさんは即決だったからな。
「分かりました。結論が出たら、俺にでもミズホにでも言ってください。」
ポーラさんはコクッと頷き、飲み物の入ったコップを空にして立ち上がり、
「それじゃ、私は行くから・・・」
そう言って、集会所を出た。その後しばらく、俺達は無言だった。

集会所を出ると、既に外は夕暮れ時だった。ルアーニは買い物が済んで、今頃夕飯の準備中かな？
「ねぇ・・・」
ミズホが話しかけてきた。どうかした？
「これからどうするの？」
これから？そうだな～・・・
「本当なら、今日中にニールセンさんとジーニスさんにも会っておきたかったんだけど・・・二人の家はここから島の反対側まで行かないといけないからね。さすがに遅くなる。今日はこれで切り上げ

て、家に帰ろうよ。」
「そう・・・じゃあ、明日はその二人の家ね。」
「あぁ。さて、またシルフォンを呼び出すか。」
俺はシルフォンを呼び出し、ミズホの家を目指した。

「着いたよ。」
港からミズホの家まで、シルフォンが走り続けること二十分。太陽は既に半分ほど隠れてしまっている。そこから伸びる影は、かなり長かった。
「ブルルル・・・」
シルフォンが少しだけ声を出す。ここまで全力疾走だったけど、あまり息切れしている感じがしない。底なしのスタミナだな、相変わらず。
「うん・・・ありがと、ワタル。」
『チュ・・・』
「え!?」
ミズホはお礼を言うと同時に、俺の頬にキスを落とした。突然のことに、俺は思わず声を上ずらせた。
「ミズホ?・・・なんで?・・・」
「あら、イーハンじゃこれが普通よ。それに、感謝の意も込めてね。じゃ、また明日!」
ミズホは最後に笑顔を見せて、家へと駆けていった。俺はしばらく、その場で呆けていた。ミズホがキスした場所を押さえながら。そんな俺を、
「ブル?」
シルフォンは不思議そうに見ていた。

ミズホの家からの帰り道。俺はシルフォンから降り、トボトボと一人歩いていた。とはいっても、今は一人の方が気楽だ。別れ際、ミズホに落とされたキス。今もまだ、俺の頬にはミズホの体温が残

っているかのようだ。ミズホは、これが普通だって言っていた・・・
けど、もしそうだとするならば、ここまで深く考えている俺は、意識しすぎているんだろうか。とはいっても、あれが普通だっていうのは、ミズホの国の常識だ。こっちじゃそうでもないし・・・なにより、俺のファーストキスだった。特にあげたい人がいたわけじゃないけど、何の前振りもなく奪われると、動揺しないはずがない。
「感謝の意を込めて、か・・・」
お礼にキスなんて、映画の世界だけだと思っていた。刺激的な、大人の世界だけのものだと思っていた。
でも、現実についさっき、俺の身に起こったことだ。なんだろね・・・この実感のなさは・・・
「ハァ～・・・」
思わず、何度もため息をついた。ため息をつくと幸せが逃げるってよく言うけど、この微妙な気持ちが何か分かるのなら、少しくらいの幸せと引き換えでもいいかな。
「あ、ワタル君！」
横から声がした。そこには、マリアの姿があった。どうやら買い物の帰りらしい。お袋さんのお使いか？
「ま、そんなとこ。それより、助っ人の方はどうだった？」
マリアは俺の横に並ぶと、黒いショートヘアーを揺らしながら聞いてきた。俺は、とりあえずミーフィーさんの協力を得たことと、ポーラさんと話したことを伝えた。
「そっちはどうだった？」
「こっちはあんまり・・・応援は集められそうだけど、選手とかってなると・・・」
だよな。難しいのは、やっぱり選手やコーチ陣の招集だな。選手は、ポーラさんとエドさんの承諾が得られたとしても、あと五人必要だ。コーチは、監督と副監督以外は考えてさえいない・・・
「間に合うかな・・・」
思わず、そんなことを言ってしまった。

「なにが？」
マリアが、俺の顔を覗き込みながら尋ねる。
「助っ人探し。エントリーまでに間に合うかなってさ。なんせ、選手だけであと五人だからな。コーチその他裏方まで含めれば、その数は相当なものだ。」
言ってて憂鬱になりかける。それを全部、俺一人で集めるわけか・・・やると言った手前、最後までやると思うけど・・・前途多難だよ、マジで。
「でも、ワタル君なら大丈夫だよ。」
マリアは俺の前に回り込むと、そう言ってニッコリと笑った。今回ばかりは、だよなとは言えなかった。

「お帰りなさい。今日はまた、ずい分と遅かったんですね。」
玄関に入ると、ルアーニがやや呆れ顔で俺を待っていた。
「否定はしないよ。」
マリアと別れた後、トボトボと家に向かって歩いていたら、日がすっかり暮れてしまった。
「ま、新チーム作りが忙しいってことで、一つ頼むわ。」
「それは承知していますけど・・・こんなとき、上手く連絡を取る手段でもあればいいんですが・・・」
連絡手段ね・・・テレパシーや召喚獣を使ってなら、出来ないことでもないだろうけどな。ところで、今日の晩飯は？
「今日は貝のリゾットです。」
ルアーニがそう言うと、確かに、リビングの方から美味そうな匂いがしてくる。俺とルアーニは、そのまま夕食へと流れ込んだ。

「ルアーニ、そっちはどうだった？」
こっちの助っ人の話を一通りした後、俺はルアーニに話を振った。
「いくつか、手応えがある所が出来ました。裏方の方は、助力できそうです。」

「そうか、助かるよ。なんせ裏方に関しては、ヒーリルに偉そうなこと言っときながら、なんにも考えてなかったからな。」
後先考えてないな、相変わらず。
「それで、明日はどうされるんですか？」
「明日は、監督と副監督の候補に会っておこうかと思ってさ。夕食まで帰れるように、なるべく努力するよ。」
「お願いします。ところで、監督と副監督の候補って誰なんです？」
俺はルアーニに、候補の二人のことを話した。
「なるほど。そのお二人なら、確かに適任でしょう。」
「だろ。もっとも、受けてくれるかどうかは未知数だけどな。」
「頑張ってくださいね。僕は、祈ることしか出来ません。」
祈ることだけ、か・・・それで充分だよ。お前の方も、引き続き頼むぜ。裏方探し。
「お任せください。」
ルアーニのその笑顔が、今の俺には何よりも頼もしかった。

そんで翌朝だ。今日も今日とて、
「おっはよ～！」
マリアの元気な挨拶が飛んでくる。ったく、朝から元気だな。
「だってだって、とってもいいお知らせがあるんだもん！」
そう言いながら、マリアがその場でクルクルと回る。いいお知らせ？
「なんのことですか？マリアさん。」
「なんとなんと、助っ人が見つかったんだよ！」
「・・・」
一瞬、俺とルアーニは固まった。だけど俺はすぐに、
「でかしたぜ、マリア！」
マリアを抱き締め、その場でグルグル回っていた。
「わわ、ワ～タ～ル～く～ん～！」
マリアは少し目を回しているが、テンションの高くなっていた俺

は、それにすぐに気づけなかった。
「んで、その助っ人ってのは、どこの誰なんだ？」
「あたしだよ。」
マリアが答えるより先に、その人物は姿を現した。
「久しぶりだね、ワタル。」
そこに立っていたのは、赤茶色のショートヘアーを風になびかせ、くわえタバコをふかしている、よく見覚えのある女性だった。
「バ、バニルさん？」
「よっす。」
そこにいたのは、数年前にこの町を旅立ったはずの、バニル・ソナチネさんだった。バニルさんは、軽くウィンクをしながらこっちに手を振っている。俺はマリアを離し、バニルさんの下に駆け寄った。ルアーニもそれに続く。
「お久しぶりです。いつ戻ってきたんですか？」
「ついこの前にね。やっぱ、あたしにゃ山より海の方が、性に合ってるわ。」
「あれ？山があたしを呼んでいるんだって言って、数年前に島を出た人がなに言っているんです？」
「きっついね～、ルアーニは。それにしても、あんたますます可愛くなったわね。」
バニルさんはそう言うと、何かを確かめるようにルアーニの胸を触っていた。
「・・・なにやってんスか？」
「いや、ルアーニが本当に女になったんじゃないかと思ってさ。」
「僕は男ですよ？」
ルアーニのその笑顔を見て、
「・・・みたいだね。」
そう言って手を離した。さて、本題に入らせてもらっていいでしょうかね？
「あぁ。」

「助っ人を引き受けてくれるそうですが、選手の方向で？」
「ま、そのつもりでね。マリアの頼みとあっちゃ、あたしも無下に断れないし。」
バニルさんはマリアを見て、ポリポリと頭をかきながらそう言った。
「野球の経験、あるんすか？」
「あいにくとゼロだ。観たことしかないよ。」
だけど、それがどうしたと言わんばかりに、バニルさんは不敵に笑った。
「それでも、やるだけやらせてもらうさ。これでも、足腰の強さと体力には自信があるよ。だてにこの数年、山を歩いてきたわけじゃないわ。」
それはそれは、頼もしいことで。じゃ、一つよろしく頼みます。
「あぁ、こちらこそな。」
こうして、また一人仲間が増えた。さらにその後、フローラからエドさんの協力を取り付けた旨が伝えられた。さらにその日の内に、監督候補のニールセンさん、副監督候補のジーニスさんの協力を取り付けることが出来た。そして、ポーラさんも協力してくれるらしい。破竹の勢いとは、まさにこのことだな。
だけど、こういうのは基本、長続きしない。そのことに俺は、しばらく気づかなかった。

第三章　姫の助力

第三章

姫の助力

エドさんやポーラさんが助っ人に、さらには監督や副監督も決まり、まさに破竹の勢いだった。クラス内に高まる押せ押せムード。なんだかもう、予選を突破してしまったかのような盛り上がり。

でも、基本的にそんなのは一時的で。破竹の勢いは、まさにその場で潰えた。あれからかれこれ一週間。ルアーニやクラスメイトの活躍で、裏方は徐々に固まりつつある。が、肝心の選手集めが、一向に進まなくなってしまった。

「あと四人か・・・」

俺は空を見上げながら、一人、そんな言葉を呟いた。ここは小高い丘の上。ランニングの途中にある所だ。青い空と、見慣れた街並みと、群青の海が見渡せる。

「どうしたもんかな〜・・・」

そう呟いて、俺は草むらの上に寝転ぶ。今日は少し風が強い。海の匂いが鼻をつく。

「あ、ワタル君。なんしてんの？」

誰かが俺を呼んだ。視線を向けると、

「ヒーリルか。」

スケッチブックを抱えたヒーリルがいた。絵でも描きに来たのか？

「うん、そんなとこ。ワタル君は？」

「休憩中。」

「あぁ、トレーニングのかいな。ほな、すぐ行ってまうん？」

「いや、もう少しここにいるよ。」

俺がそう言うと、ヒーリルはニッコリと笑い、俺の横に座った。ヒーリルは、昔から絵が好きだった。そういや、昔は俺の似顔絵と

かも描いてくれたっけ。クレヨンや色鉛筆で描いてくれた俺の絵を、それはそれは自慢げに見せてくれた。マリアがよく対抗していたけど、マリアのは落書きに近かったからな。正直、絵でヒーリルに勝てる奴はそういないだろう。

「なかなか見つからんもんやね、助っ人・・・」

鉛筆を動かしながら、ヒーリルはそう言った。

「あぁ、そうだな・・・」

俺は空を見上げたまま、そう返した。やっぱ難しいよな。いきなり、野球チームに入ってくれなんてよ。

「そういえば、ミズホちゃんは？一緒やないん？」

「あいつなら、今頃港の方にいるだろうぜ。」

大方、マリさんと二人で、助っ人探しを頑張っているんだろう。トレーニングが終わったら、俺も合流すっかな。

「さて、俺はそろそろ行くぜ。あんまり休みすぎたら、意味がなくなっちまうからな。」

俺は軽く伸びをすると、ヒーリルにそう言った。ヒーリルは俺を見上げながら、こう言った。

「なぁ、ワタル君。ワタル君は、どこまで強くなるつもりなん？」

どこまで・・・どこまでね・・・

「強さに上限なんてない・・・師匠によく言われた言葉だ。」

だから、その質問の答えはひとつ。

「どこまでも、俺は強くなろうと思う。きっと師匠も、そうするはずだからな。」

「フッ・・・頼もしいことだな。」

俺達の後ろから声がした。振り返った先には、腰に剣を携え、隻眼でこちらを見つめる女性。でも、助っ人関係で声をかけた人じゃないことは分かる。

「誰なん？ワタル君の知り合い？」

ヒーリルが絵を描く手を止め、俺の横に立つ。

「あぁ、俺のよく知る人だ。お久しぶりです、ユンナさん。」

「久方ぶりだな。かれこれ、二ヶ月ぶりほどか。」
もうそんなになるのか。さて、ご用件は？
「いや、特にあるわけではない。たまたま、お前を見かけたというだけの話だ。」
偶然、か。今日は非番なんですか？
「あぁ。働きすぎだと、姫に言われてしまったからな。」
「実際、そうだと思いますよ。」
ユンナさんは真面目だからな。姫はどちらに？
「邸だ。今日は一日、邸からお出にならないそうだ。」
そうですか。珍しいですね。こんな天気のいい日なら、出るなと言わなくても出そうなのに。
「確かにな・・・おぉ、そうだった。姫からお前に、伝言を預かっていたのだった。」
「伝言？」
重要事項ですね。
「たまには顔を見せてほしいそうだ。お前も、もうすぐ姫にお仕えする身だ。研修と思って、邸に行ってくれ。」
了解です。
「頼んだぞ。」
ユンナさんはそう言うと、少しだけ口元を緩めて行ってしまった。
「なぁ、ワタル君。姫にお仕えって、どういうことなん？」
ヒーリルが、俺の顔を不思議そうに見てきた。
「あれ？言ってなかったっけ？」
てっきり、言ったもんだと思ってた。
「実はな・・・」

「えぇ～～～！！春から王女専属近衛兵士！？」
翌日の昼休み。昼食終わりの教室に、そんなミズホの馬鹿でかい声が響いた。
「なによそれ！？全然聞いてないわよ！チームのことどうすんのよ

！？」
「お、おい。落ち着けって。」
叫びながら俺を揺らすミズホを、俺はどうにかなだめつかせた。
「仕事は来年の四月からだ。それまでに、チームは形にしなきゃだめだろ？そこまでは、ちゃんと責任もって協力するって。予選が始まれば、そこからはニールセンさん達の仕事だ。」
俺がどうこうできることじゃない。正直、チームのことは監督に任せるしかないだろう。
「ひどいよ、ワタル君。どうして教えてくれなかったの？」
「いや、教えたつもりだったんだけどな・・・」
マリアが、それはそれは不満そうな瞳で見てくる。食い入るように見てくる。
「先生は知っていたけどね。きっとワタル、私に話したから、みんなにも話した気になっていたんじゃない？」
先生にそう言われると、あぁ、そうかもと思う。先生に話したの、いつだっけ？
「夏休み前、だったと思うわ。」
夏休み前、か・・・そういや、ユンナさんと前に会ったのもそれくらいだったっけ。
「それにしても、ワタルってすごいわね。どうしてそんな話が来たわけ？」
ミズホがそう聞くと、他のみんなの視線が自然と俺に集まった。
あぁ、この空気はあれか。俺にその話をしろと。ま、別にいいけど。あれは確か、夏休み前のある日だったっけ・・・

「ただいま。」
夏休み前のある日。俺はいつものように、トレーニングを終えて家に帰ってきた。今日はいつもより蒸してたな。おかげで汗びっしょりだ。
「お帰りなさい、兄さん。」

ルアーニが、いつものエプロン姿で出迎えてくれた。
「先、風呂入るわ。」
「あ、はい。それじゃその間に、夕食の支度をしてしまいますね。」
頼んだぜ。俺はそう言って、風呂の用意と共に風呂場へ急行した。
十五分ほど後。テーブルには、白身魚のリゾットが並んでいた。
後はサラダにスープ。いつもと代わり映えのない食事だ。ま、ルアーニの料理は美味いからな。見た目の変化がなくても、俺としては特に気にならない。
「あ、そういえば兄さん。こんな手紙が届いていましたよ。」
ルアーニはそう言って、一枚の手紙を差し出した。手紙ね・・・
いったい誰からだ？
「・・・あぁ、ユンナさんか。」
差出人は、『ユンナ・フォレスタウ』となっていた。師匠が旅立ってから、俺の剣術修業に付き合ってくれている人だ。若い女性だけど、剣の腕は一流。
「なんの用事だろ？」
俺はその場で封を切り、手紙の内容に目を通す。そこには・・・
「どういうことだ？」
「どうしたんです？」
俺は、ルアーニに手紙を渡した。ルアーニは中身を一読した後、俺にこう言った。
「兄さん、なにかしでかしたんですか？」
「なんでそうなるんだよ？」
俺は軽くツッコミを入れながらも、とりあえず事態を把握しようと思った。手紙の内容は、色々と小難しく書かれていたが、要約してしまえばこうなる。
『今度の日曜日、姫の下へ参上せよ』
姫ってのは・・・間違いなく『あの姫様』だろうな。つまり、俺

に姫の邸へ行けと。そんな手紙が、なんだってユンナさんから・・・確かにあの人、国防に関係する職に就いているって言っていたけど。

「行くしかないか・・・」

俺は、半ば諦めながらそう言って、手紙を便箋に戻した。

迎えた日曜日。俺は精一杯の正装をし、姫の待つ屋敷へと向かっていた。姫の屋敷は、島の東海岸を一望できる、小高い丘の上に建っていた。小奇麗なレンガ調の建物に、広大な庭が広がる。

「姫が俺に、いったい何の用だってんだ？」

手紙が来て以来、俺はそればかり考えていた。おかげでマリアに、『好きな人でもいるの？』

とかって、わけの分からない尋問をされてしまった。なんだってそんなことになるんだか・・・

「っと、着いたな・・・」

考えことをしていたせいで、危うく通り過ぎそうになった。それにしても、デカイ家だな。さて、ユンナさんはどこにいるのやら・・・

「来たか、ワタル。」

門の向こうから、そう言ってユンナさんが近付いてきた。ユンナさんの服装は、いつもの鍛錬着と違って、いわゆる正装だった。あれは確か、近衛兵の装束だったような・・・

「付いて来い。姫がお待ちだ。」

そう言って、ユンナさんは門を開けた。俺が門をくぐると同時に、ユンナさんは内側から施錠した。そしてなにも言わず、俺の前を歩き出した。俺はユンナさんの二、三歩後ろを付いて行った。

邸の中は、外観に引けをとらない豪華さだった。かなり頑張って正装した俺と、近衛兵の装束を着ているユンナさん以外は、この邸で働いているであろうメイドさんの姿しか見えない。すれ違う人々が、何年も前の知り合いにするような会釈をする。俺はそれを同じように返しながら、ひたすらユンナさんの後を付いて歩いた。

しばらくすると、階段が途切れた。どうやら最上階に来たらしい。
「この廊下の一番奥が、姫の自室だ。」
ユンナさんが指差した先には、かすかに見える大きな扉。なるほど、さすが姫だ。
長い廊下を突き進み、大きな扉の前についにたどり着いた。けっこう歩いたな・・・
『コンコン』
ユンナさんは、重厚な木製の扉をノックした。そしてすぐに、
「姫、ワタルが到着しました。」
と言った。訓練の時と同じ、厳格な口調だった。少しして、
「分かりました。入ってもらってください。」
との返答がきた。姫の声、思ったより幼いな。
「承知しました・・・ワタル、私の後に続いて入れ。」
「あ、はい。」
俺は妙に緊張していた。まぁ、無理もない。生まれて初めて、王族の姫君とご対面するわけだ。緊張しないわけがない。
「失礼します。」
「失礼します。」
俺とユンナさんは、姫の部屋に入ってすぐ、片膝を着いて頭を垂れた。これが、王族と会う際の基本的な礼儀だと教えられる。左膝を着くことも決まっている。
「ユンナ、案内ご苦労様です。」
姫は窓際にいるのか、ここからは、わずかに伸びたその影しか見えない。そしてその影は、足音と共に、ゆっくりとこっちへ近付いてくる。そしてその足音は、俺のほぼ目の前で止まった。
「あなたが、クリョホーセン・ワタルですか？」
「いかにも。」
俺は言葉を選びながら、ゆっくりとそう言った。右手がわずかに震えている。
「面を上げてください。」

姫にそう言われ、俺はゆっくりと顔を上げた。案の定、目の前には姫の顔があった。片膝を着いた俺と、目線が一直線になる所に、姫の大きな丸い目があった。
「遠路はるばるご苦労様です。まずは自己紹介を。私は、ステークランデル共和国第一王女、グレッグ・アイルです。」
アイル姫はそう言うと、やはり王女なだけあって、お手本のようなお辞儀を見せた。俺は、すぐさま自己紹介を開始した。
「私は、クリョホーセン・ワタルと申します。お会いできて光栄です、アイル王女。」
「アイルと、呼び捨てにしていただいてけっこうですよ。あと、その姿勢も崩していただいてけっこうです。楽にしてください。」
「え？いや、しかし・・・」
いきなりそうしろと言われても、普通は戸惑うわけで。助けを求めてユンナさんを見ると、
「だそうだ。ワタル、楽にして構わんぞ。」
と言って、自分はスックと立ち上がった。俺もそれに倣い、とりあえず立ち上がる。
「やはり、ワタルは大きいですね。身長はおいくつほどで？」
「そ、そうですね・・・百八十ほどでしょうか・・・」
身長なんて、身体測定の時でもない限り計らない。ましてや、詳しい数字なんか覚えちゃいない。
そして、この質問を皮切りに、アイル姫は次々と、俺に質問を投げかけてきた。好奇心旺盛な姫の瞳は、新たな発見の宝庫を見つけた子どものように輝いていた。
しばらく質問が続いた後、アイル姫はフッと口をつぐんだ。質問のネタが尽きたのか？
「さて、それではそろそろ本題に参りましょう。」
姫は少し真剣な表情をすると、窓際に歩み寄った。そして、太陽の光を背にしながら、俺に語りかけてきた。
「ワタル。今日あなたを呼んだのは、あなたに頼みがあるからなの

です。」
「頼み、でございますか？」
まぁ、そうでなきゃ呼ばれないんだろうけど。
「えぇ。まず一つ目なのですが・・・その・・・」
「？どうなさいました？」
歯切れのよかった姫が、急にモジモジし始めた。トイレにでも行きたいのか？
「実は私・・・ワタルの大ファンで・・・一緒に写真を撮ってほしいなと思いまして・・・」
「・・・え？」
俺は思わず面食らった。姫、今なんと？
「ですから、ワタルと写真が撮りたいのです。」
今度は少し照れながら、でもはっきりとそう言ったアイル姫。写真ね・・・まぁ、姫の頼みとあらば、断るわけにもいかないだろう。
「私は構いませんが・・・あの、このお部屋でお撮りになるのですか？」
「えぇ。あのベッドの上です。」
姫が指差した先には、姫一人にはあまりも大きいシングルベッド。この大きさは、すでにシングルじゃないかな？・・・
「ユンナ。すみませんが、撮影をお願いします。」
「承知。写真機はどこに？」
「私の机の上です。」
姫が指差すと、ユンナさんはサッとそのカメラを持ち上げた。重厚そうな一眼レフだ。
「ワタルはこちらへ。」
「あ、はい。」
俺はベッドの方へ視線を向けた。すでにアイル姫は、ベッドの上に座っていた。
「姫、私はどうすれば？」
「まずは、私の隣で胡坐をかいて座ってください。」

「あ、はい。」
胡坐をかいて座れ、ね。一国の王女と撮る写真で、そんなポーズをしていて大丈夫か？ま、姫がいいと言うならいいんだろうけど・・・
「では、そこに私が・・・」
「え？ちょちょちょ！？」
「？どうかしましたか？」
姫は突然、俺が胡坐をかいている上に座ってきた。
「よ、よろしいのですか？こ、こんな格好で・・・」
「構いません。それよりワタル。手の位置はここですよ。」
そう言うと、姫は俺の手を掴んで。姫を抱きかかえるようなポーズをとらせた。
「姫・・・なぜこのような格好を？」
「昔、よく父上にしていただいたものですから。この体勢、落ち着きます・・・」
姫はそう言って目を閉じた。
「姫、目をお開けください。それとも、閉じたままお撮りしましょうか？」
「そうですね・・・では、このままで。」
「承知しました。ワタル、もう少し笑顔を作れ。」
「あ、はい。」
俺は緊張と戸惑いを感じながらも、精一杯の笑顔を作った。今日の俺、なんだかいっぱいいっぱいだな・・・
「いきます・・・」
ユンナさんがそう言って、シャッターを押す。フラッシュが一瞬視界を奪い、太陽の光がすぐそれを取り返した。
「ありがとう、ユンナ。それは後で現像に回してください。」
「承知しました。」
「ワタルもありがとう。一生の宝物が出来ました。」
「いえ、そんな・・・私にとっても、一生の思い出です。」

俺がそう言うと、姫は嬉しそうに笑って俺から離れた。そして、
「では、二つ目の話に入りましょう。」
と、またも少し真剣な表情でそう言ったのである。
「二つ目のお願い・・・それは、ワタルに私の専属近衛兵士となっていただきたい、という事なのです。」
「専属近衛兵士、にございますか？」
意味が分からないわけじゃない。が、聞き返さずにはいられなかった。
「元々、私の専属近衛兵は二人でした。ですが、その内の一人が兄の専属近衛兵になってしまって・・・今はユンナ一人なのです。無論、ユンナの腕は信頼しています。ですが、四六時中年中無休では、ユンナが倒れてしまいます。」
「私は大丈夫だと申したのだが、姫が聞かなくてな・・・」
そう言って、ユンナさんは少し笑った。
「そこで、ワタルにお願いしようということになったのです。無論、ワタルがすでに決めた道があると言うのであれば、それは尊重します。」
なるほど。つまり、命令ではなく、あくまで要請であると？
「そうです。」
そう言い切り、姫はニッコリと笑った。
さて、すでに決めた道ね・・・ないこともないんだけど・・・ねぇ、師匠？
「姫。私は昔、師匠より、剣を振るう意味を教えられました。」
「なんと、教えられたのですか？」
「憎しみを生むために振るうのではない、愛を守るために振るうのだと。」
「愛、ですか・・・」
姫は、照れくさそうな残念そうな、なんとも言えない声を出した。ま、愛って部分は、いろいろと変更が利くだろうけど。
「姫は、我々民のことを常に第一に考えてくださる、偉大なお方で

す。それは、姫の愛情に他ならないでしょう？」
「無論です。それが姫である、私の務めです。」
「では、その姫をお守りすることは、剣士である我が務め。この国の民である、我が務めにございます。」
俺はそこまで言って跪き、頭を垂れた。
「まだまだ未熟者ではございますが、このクリョホーセン・ワタル、この命に代えましても、姫をお守りいたします。」
「ホントですか！」
姫は、たいそう嬉しそうな声を上げた。そして俺の所へ近付くと、下から俺の顔を覗き込んできた。
「ありがとうございます、ワタル。その力、頼りにさせていただきます。」
「お任せください。」
俺はその日、初めて、リラックスした状態で笑えた。

「・・・とまぁ、こんな感じ。」
「ワ、ワタル君。お姫様と写真まで撮ったの？」
マリアが、それはそれは驚いた顔でこっちを見ていた。
「あぁ、まぁな。何日か後に行った時は驚いたよ。部屋の壁にデカデカと、俺と姫の写真が飾ってあったんだからな。」
姫はとてもご機嫌だったけどな。あの笑顔だけ見てると、普通の十歳の女の子なんだけどな。
「ねぇ、ワタル。姫のお邸には、メイドさんがいっぱいいたのよね？」
ミズホが、確認するように聞いてきた。あぁ、たくさんいたぞ。姫一人のお世話をするのに、あんなに必要なのかというくらいいた。
「一人くらい、ウチのチームに引き抜けないかしら？」
「・・・なんだって？」
俺は、思わず聞き返した。
「一人くらい、そのお姫様なら許してくれるんじゃない？どうやら、

ワタルに惚れているみたいだし。」
一人くらいって、そんな簡単な話かよ。あと、姫が俺に惚れてる云々は聞き流すぞ。
「とにかく、ダメもとでもいいから頼んでみてよ。この一週間、選手は集まってないんだから。」
それがピンチなのは重々承知しているよ。女子野球の開幕が三月からとはいえ、チームが早くに始動できるに越したことはない。
「分かった。ダメもとで頼んでみるよ。その代わり、そっちはそっちで頼むぜ。」
「OK。今日もガッツリ行くわ。」
ミズホはそう言って、不敵に笑った。さて、今日は久しぶりに、姫に会いに行くとしますか。

放課後。俺は学校を出ると、まっすぐに姫の邸へ向かった。かれこれ三週間は行ってないな。姫の顔を見るのも久しぶりだ。
邸に着いた俺は、姫が用意してくれている部屋に荷物を置く。普段は、ユンナさんと共同で使っている部屋だ。でも、ユンナさんの荷物は見えない。
「まだ来てないか、今日も非番か・・・」
俺は独り言を言いながら、近衛兵の装束に着替え、姫の部屋へと向かった。
『コンコン』
姫の部屋をノックすると、
「はい？」
中から姫の声が聞こえた。
「アイル姫、クリョホーセン・ワタルにございます。」
「ワタル！？」
姫の驚いた声が聞こえてから数秒後、不意に目の前の扉が開いた。
そして、
「ワタル！お久しぶりです。」

アイル姫が、俺に向かって思いっきり抱きついてきた。出張から帰ってきた父親を、心待ちにしていた娘のようだった。
「お久しぶりでございます、アイル姫。ユンナさんから、ご伝言を承りまして、こうして今日、馳せ参じた次第です。」
「そうでしたか。ユンナがちゃんと、伝言を。」
抱きつくことを止めた姫だったが、俺の手を握って離そうとしない。
「さ、入ってください。いろいろ、お話したいことがあるのです。」
姫はそう言って、俺の手をグイッと引っ張った。話ね。今日はたっぷり、お付き合いするとしましょうか。

姫の部屋に入ってから、すでに数十分が経っている。が、姫の話は止まりそうにない。この三週間の間に、姫はずい分と冒険したみたいだ。もっとも、姫の話を聞くのは俺だけじゃない。メイドさんの一人、リンス・ブルーハワイさんも一緒だ。リンスさんは、ここのメイドさん達の中でも、特に姫と仲がいい人だ。歳は知らないけど、若く見える。今も、優しい細目で紅茶を注いでいる。
「どうぞ、ワタルさん。」
「あ、ありがとうございます。」
いい茶葉使ってるよな～。さすがは姫だ。
「今日の姫様、いつにも増してお元気に見えます。ワタルさんがいらっしゃるからでしょうか？」
「ちょ、ちょっとリンス！？」
姫が途端に慌てだす。
「まったくもう・・・ところでワタル？」
「なんでございましょう？」
「ワタルは、野球に興味がありますか？」
野球？俺は興味ありますと答えたものの、姫の口からそんな話が出たことに、疑問を感じた。
「実はこの前、他の島を統括している兄上達と会談の場がありまし

て。その場で、来年の女子野球の話が出たのです。」
　みなさん、野球がお好きなんですか？
「そうである兄と、その野球を、島のステータスとしか見ない兄がいますが・・・」
　ステータスね・・・ま、一番目と二番目あたりだろうな。
　この国は、大きく分けて四つの島によって構成され、現在、一つ一つの島を、四人いる王族がそれぞれ管理・統括している。アイル姫が統括するのが、俺達が住む南のラルック島。首都がある北のカンテル島は、第一王子のイワン氏が統括。イワン氏はやり手と評判で、完全な実力主義者。あの人の下じゃ、この国は何かと殺伐としそうだな。
　東のポルカー島は、第二王子のマルサック氏が統括している。人の良さそうな感じなんだけど、フローラいわく、『腹に一物ある笑顔』らしい。あいつがそう言うなら、おそらくそうなんだろう。
　西のグリアンド島は、第三王子のキルグス氏が統括している。気さくで能天気で、傍から見るとなんも考えていないように見える。俺的には、次の王はあの人でいいんだけど。
「それで姫？野球がどうかしたのですか？」
「えぇ・・・私はあまり存じなかったのですが、野球の国内予選において、近年、我が島のみ参加が無いそうなのです。そのため、一番上の兄であるイワンより、皮肉られてしまって。」
　ん？なんだって、イワン王子が姫を皮肉る必要があるんです？
「イワン様は、少し女性蔑視の傾向があるのです。ご兄弟唯一の女子であられる姫様を、いつも見下しているのですわ。イワン様が統括なさっているカンテル島から、ここ数年は、女子野球の国内代表が出ております。参加さえない我が島や姫様のことを、目の敵にしていらっしゃるのかも知れません。」
　リンスさんが、少し眉をしかめながらそう言った。そういや、確かに去年もおととしも、北の島から代表が出てたっけ。
「私が悪く言われるのは、構いません。ですが、兄のあの言い方は、

この島の民までも侮辱するかのようでした。私は、それが許せないのです。ですが、私にはどうすればいいのか分からなくて・・・」
なるほど。こいつは、姫にとっちゃ渡りに船か。
「でしたら姫。ちょうどよい話があります。」
俺はそう前置きして、現在、俺達の間で進行している計画について話した。最初は驚いていた姫だが、すぐにその表情は嬉々としたものになった。
「まだ人数が完全ではありませんが、発案者であるミズホを中心に、世界を目標としています。」
「そうだったのですか！私の知らないところで、そこまで進んでいたとは。ワタルが最近来られなかったのも、そちらを頑張ってくれていたからなのですね？」
「一応、私が、諸々の問題の責任者となっておりますので。それで姫。ミズホからの提案ですが・・・」
「このお邸のメイドから一人、助っ人ですか・・・そうですね・・・」
「姫。」
不意に、リンスさんが姫を呼んだ。その目は、いつもよりも鋭かった。
「その助っ人の話、私に任せていただけないでしょうか？」
「リンスに？」
姫が、思わず首を傾げた。どうしたんですか、リンスさん？
「私、こう見えても野球の経験者ですわ。今から五年前、この島から国内代表が出た際のメンバー。私は、その生き残りですわ。」
五年前・・・それって・・・
「レイナーズの海難事故、ですか？」
「えぇ・・・」
「レイナーズの海難事故？」
姫は、またもや首を傾げた。姫はご存じないようですね。リンスさん、僕の方からお話させていただいてよろしいでしょうか？

「いえ、ここは生き証人である私から。」
そうですか。では、お任せします。俺がそう言うと、リンスさんは昔話を始めた。
「今より五年前。私は、女子野球チーム『ラルック・レイナーズ』の一員でした。我がチームは、他の強敵を破り、国内予選を突破。南地域トーナメントに参加するため、船でマユナーダ王国を目指していました。」
マユナーダ王国は、この国と貿易の盛んな国だ。あそこは世界でも数少ない、女王が統治者の国だったな。
「その航路の途中・・・我々の乗った船は・・・嵐に巻き込まれ、海の藻屑と化してしまったのです・・・」
リンスさんが、スカートの袖をギュッと握りしめた。
「私は、運良く近くの島に流れ着き、そこの方々に傷を癒していただきました。ですが、チームのみんなは・・・助からなかったのです・・・私は、神を恨みました。なぜ、最も若い私を生かしたのか・・・みんな、世界制覇へ意気揚々としていたのに・・・それからしばらくして、私はこの島に帰り、今はこうして、姫のメイドとなりました。」
「そうだったのですか・・・辛いことを、話させてしまいましたね・・・」
姫は、申し訳なさそうに俯いた。それにしても、なんだってその後、チーム再建の話が出なかったんですか？
「もともと、周りからの反対もありましたし、後にも先にも、我が島のチームが国内代表となったことは、ありませんから。ですが、五年の時を経た今、再び、野球をしようという動きが出たのは、時代の流れかも知れません。なにより、私にとっては、運命としか言いようがありません。ですから姫。チームの助っ人の話、何卒、この私めにお任せを。姫のご期待に、必ずや応えてみせます。」
そう言って、リンスさんは深々と頭を下げた。いかがいたします、姫？

「リンスがそこまで言うのなら、私は止めません。リンス、頑張ってください。」
「はい！ありがとうございます！」
リンスさんは、大きな声でそう言った。
「ワタル。」
姫が俺を呼んだ。
「後日、ミズホを邸へ。一度、お話してみたいです。」
「承知しました。お伝えしておきます。」
こりゃミズホの奴、ビックリするだろうな。さっそく、明日にでも伝えるとしよう。
こうして俺達に、新たな仲間が加わった。

後日、俺はミズホを連れて邸へと向かった。姫と会ったミズホは緊張しまくっていた。けど、野球チームプロジェクトに全面的に協力するという姫の言葉に、最後は目を輝かせて喜んでいた。

第四章～祭り～

第四章
祭り

「みんな、おっはよ～う！」
『おはようございまーす！』
いつもと同じ朝。先生の元気な挨拶が、今日も飛んできた。少し曇った空模様だけど、先生の表情は、いつもと同じで晴れ渡っている。
「さて、いよいよ十月ね。今月も後半になってくると、朝晩は涼しくなってくるわ。いよいよ、季節の変わり目ね。この時期は風邪を引きやすくなるから、注意してね。」
風邪ね・・・ここ数年の俺には無縁の言葉だ。
「あと、今週の土日は、皆さんお待ちかね、バスクーダの開催よ！」
あぁ、もうそんな時季か。
「サンディ、バスクーダって何？」
ミズホが手を挙げて質問する。あぁ、ミズホはイーハンから来たから知らないのか。
「バスクーダっていうのは、毎年やってるお祭りよ。秋から冬にかけての大漁を、神様にお願いするためにね。この島は、漁業が主産業だから。」
「へぇ～、面白そうじゃない！」
ミズホの目が、一気に爛漫と輝きだした。どうやら、かなりお祭り好きみたいだ。
「よし！それじゃみんなで、お祭りに行きましょう！」
ミズホは立ち上がると、高らかにそう宣言した。みんなで？
「そうよ。みんなで行けば、助っ人発見の可能性も高いわ。下手な鉄砲数撃ちゃ当たるってね。助っ人はあと三人。この土日で全部見つけて、チーム始動よ！」

「おう！」
マリアが大声で賛成した。他のみんなの表情も、自然と笑顔になった。こうして俺達は、クラス総出で祭りに繰り出すことになった。

祭り当日。学校に集合した俺達は、ワイワイと談笑しながら、メイン会場である港を目指した。
大漁を願う祭りであるバスクーダは、漁業の中心である港から砂浜にかけて、様々な出店や企画で目白押しな、島の一大イベントだ。毎年、多くの観光客や、他の島の住人達も参加する。バスクーダは、秋だけでなく春にも行われる。
「うわぁ、けっこう人がいるわね。」
港に着くと、ミズホが人込みを見て、ため息混じりにそう言った。しょうがないだろ？祭りなんだから。
「ふむ・・・去年よりさらに盛況のようだな。」
フローラが何やらニヤニヤしている。
「・・・いい匂いがする・・・」
スノウはすでに、鼻がヒクヒク動いている。無表情は変わらないが、いつも以上に目が泳いでいる。食べ物中心だけど。
「さ、ここからは別れて行動よ。お昼過ぎにここへ集合。それじゃみんな、よろしく！」
ミズホの合図と共に、みんなが方々に散っていく。俺はというと、ミズホとマリさんが隣にいる。この二人を案内がてら、助っ人探しをすることになっている。
「さて、人は大勢いるけど、どうやって声をかけたものか・・・」
俺は人の波を見ながら、そう言ってため息をついた。
「そんなの、手当たり次第に決まっているでしょ？」
「あのね～・・・このお祭りに来ているのは、この島の人達だけじゃないのよ？」
マリさんの言うとおりだ。国外の人達に言ったところで、見向きもされないだろう。でも、見た目で見分けがつくわけじゃないし・・

・
「この島の人だけが集まっている場所、ないの？」
ミズホが俺を睨みつけ、そう聞いてくる。出店ばかりのこのあたりじゃ、そんな所はない。イベントやってる、浜辺の方なら別だろうけど。
「なら、浜辺に行くしかないわね。」
というわけで浜辺に向かったんだけど・・・

「いやはや、考えることは皆、同じというわけだ。」
フローラが、愉快そうに笑いながらそう言った。浜辺に着いた俺達の目の前には、どういうわけだか、数分前に別れたクラスメイト。ま、俺もなんとなく予想できたけどな。
「さて、今年はビーチフラッグか・・・」
俺は浜辺を見ながら、そう呟いた。毎年、バスクーダの期間中、浜辺では何かとイベントが行われる。去年は、ビーチバレーだったような・・・
「ワタルくーん！」
遠くから、マリアが俺の名を叫びながら走ってくる。あいつには、大会の選手名簿を取ってくるように言っておいた。
「はい、選手名簿。どこの人かまで、バッチリ載ってるよ。」
俺は礼を言って受け取り、その紙に目を通す。この島からの参加は・・・二人か・・・一人目は、イル・リステマル・・・聞いたことない名前だな・・・もう一人は・・・
「おい、マリア。」
「なに？」
俺の顔を、いつもと同じ瞳で見てくるマリアに、俺は聞いた。
「なんで参加メンバーの中に、お前の名前があるんだ？」
「だって～・・・エントリーしないとくれないんだもん、エントリー表。」
マリアは、仕方なかったと言わんばかりに、口を尖らせていた。

だからって、なにもお前がエントリーすることないだろ？言ってくれれば、俺とかが代わりに・・・
「ワタル君、この試合、女性限定やで。」
ヒーリルが、看板を指差してそう指摘する。
「・・・あぁ、気づかなかった。」
でもお前、大丈夫か？
「任しといてよ。こう見えて、足には自信あるよ。」
マリアはそう言って、グッと胸を張った。お前の場合、足が速いって言うより、すばしっこいんだよ。
「またまた～、そんなに褒めちゃって～。」
どっちかっていうと、皮肉ったつもりなんだけどな～・・・ポジティブというか・・・昔っから、俺の言うこと言うことをいい方に取るからな。そういう意味では、ヒーリルの方がからかい甲斐があるんだけど。
「ま、もう後戻りは出来ないんだしさ。四強くらいで負けてくるよ。」
四強までは行くって自信か？
「四強なんて甘っちょろいこと言わないで、いっそのこと優勝しちゃいなさいよ。マリアならできるって！」
ミズホはそう言ってマリアの肩を掴むと、瞳を輝かせて親指を立てた。
「優勝か～・・・ワタル君がキスしてくれるって言うなら、考えてあげてもいいけど？」
マリアはそう言うと、いたずらな瞳をこっちに向けてきた。瞬間、俺の頭に浮かんだのは、ミズホにキスされた、あの時の光景だった。それを思い出すと、耳まで赤くなっていくのが分かる。
「ん？どうした、ワタル君？顔が真っ赤だぞ？」
フローラが、横で俺を見ながらクスクスと笑っている。
「あ、ホントだ～。照れないでよ、ワタル君ってば。半分冗談だったのに～。」

「半分本気やん！？」
勘違いして体を揺らすマリアと、思いっきりツッコミを入れるヒーリル。まぁ、俺としてもそこはツッコミたかった。
「ま、とにかく頑張ってみるよ。ワタル君のことだから、気になるのはもう一人の方だろうし。」
マリアはそう言うと、選手が集まっている所へと向かった。
確かにマリアの言うとおり、俺としては、マリアの順位云々より、イル・リステマルという女性の実力が気なっていた。この人の実力次第では、チームにスカウトしたい。あと三人・・・ミズホがこの前言ったとおり、できることならこの土日で集めてしまいたい。そして少しでも早く、チームとして始動したい。そう思うと、俺の目は自然と、選手たちの方に向いていた。

『パン！』
号砲と共に、浜辺のあちこちから歓声が沸き起こる。一本の旗を巡って争う二人の女性。その顔は真剣そのもの。勝利に笑い、敗北に泣いても、最後には握手で健闘を称え合う。
そんな光景が、かれこれ三十分ほど続いている。
「意外と、多かったわね・・・」
ミズホが、何度も続く同じ光景を見ながらそう言った。試合が始まって三十分。参加人数が多いせいか、マリアもイルさんという人も、試合に姿を見せてはいない。試合の順番はくじで決まるらしく、マリアとイルさんは初戦で鉢合わせていた。
「マリア君は、足の速さならクラスダントツだ。初挑戦とはいえ、並の相手が勝てる人物じゃない。」
フローラが、俺の横で試合を見ながらそう言った。確かにマリアは速い。スポーツ万能のスノウでさえ、短距離なら遅れをとる。あの俊足は、野球でも存分に活かせるだろう。
「あ、マリアちゃんの番みたいやで。」
ヒーリルがそう言って、スタート地点に立つマリアを指差した。

確かに、周りの選手よりひと際小さい、見慣れたショートブラックがそこにいた。少し緊張しているのか、表情が硬い。
「ということは、横の人がイル・リステマルさんというわけですね。」
ルアーニが、少し目を細めてそう言った。まぁ、そういうことになるよな・・・
イル・リステマルさんは、マリアより身長が一回りほど大きい。青みがかったショートヘアーに鋭い視線。まっすぐに、旗だけを見つめている。ビーチフラッグをするために、少しばかり露出の激しい服からは、引き締まった体の線が見える。しっかり鍛え上げた体だ。
「ふ～む・・・日頃から鍛えてはいるみたいだな・・・」
「やはり、分かるものかね？」
フローラが、俺を見ながらそう聞いてきた。ま、何となくだけどな。
「さて、お手並み拝見といこうか。」
フローラのその言葉を最後に、俺達は押し黙った。視線が、マリアとイルさんに集中する。二人は、砂浜に寝そべり、スタートの体勢だ。そして、砂浜が一瞬の静寂に包まれた直後、
『パン！』
号砲が鳴り響き、マリアとイルさんはほぼ同時にスタートを切った。十数メートルほど離れた所にある旗めがけ、二人は一目散に走った。そして、ほぼ同時に旗に飛びつく二人。
『ズザー！！』
盛大な砂煙が立ち込める。そこから旗を掲げて立ち上がったのは、
「獲ったどー！！」
高らかに叫ぶ、イルさんだった。瞬間、ビーチは大きな歓声に包まれた。敗れたマリアは、しばらくイルさんを見上げていた。イルさんはそれに気づくと、スッと右手を出した。マリアは、その手をガッシリと掴んで立ち上がり、二人はお互いの健闘を称えあって互

いを抱き締めた。会場を包んでいた大きな歓声は、大きな拍手となった。

「いや～、負けた負けた。」

試合後しばらくして、マリアが俺達の所へ戻ってきた。肘と膝に絆創膏を貼ってある。派手に飛びついたからな。ケガ、大丈夫か？

「うん、大丈夫。へっちゃらだよ。」

そう言って、マリアはいつもの笑顔を見せた。ならいいんだが。

さて、イルさんはどうだった？

「・・・速い、速いよ。それに、とっても大きい。」

あぁ、それはこっから見ても分かったよ。ま、お前と速さがほとんど変わらないんだ。となれば、身長差だけお前の方が不利だからな。

「うん・・・そうだね・・・」

「・・・やっぱ、負けると悔しいか？」

俺がそう言うと、マリアは俺の腰に手を回して顔を胸に埋めてきた。

「当たり前だよ・・・悔しくて、情けなくて・・・ちょっぴり怖くて・・・」

怖い？何がだ？

「分からない・・・でも、今は・・・怖くない・・・」

怖くないと言いながら、マリアの肩は小刻みに震えていた。俺はただ、マリアの頭を撫でるしか出来なかった。

「落ち着いたか？」

「うん・・・」

マリアはジュースを飲むと、俺にそう言って微笑んだ。あの後、マリアは十数分泣き続けた。今でも少し目が赤い。俺はその間、黙ってマリアを抱き締めているしかなかった。フローラが持ってきてくれたジュースを飲んで、落ち着きを取り戻してきている。

マリアがそうこうしている内に、大会の方は終わりを迎えていた。結果は、イルさんの優勝であった。こりゃ、マジで即戦力だな。
浜辺に設置された表彰台から降り、他の選手と握手を交わすイルさん。彼女はそのまま浜辺を横切り、まっすぐこっちに向かってきた。そして、マリアの前に立ち、ゆっくりと手を差し伸べた。
「え？」
マリアは、少し困惑した目でイルさんを見上げた。イルさんはニッコリと微笑むと、
「一回戦、いい試合だったぜ。」
と言った。マリアはしばし、イルさんを見上げていた。やがてゆっくりと立ち上がり、
「優勝、おめでとうございます。」
そう言って、イルさんとしっかり握手を交わした。二人は嬉しそうに笑った後、ゆっくりとお互いの手を離した。イルさんは、そのままマリアの横に腰を下ろした。
「時間あるだろ？少し、話しようぜ。」
「はい。」
マリアは、嬉しそうにイルさんの横に座った。俺達の同席も、快くＯＫしてくれた。
「マリア、だったよな？ケガは大丈夫か？」
イルさんは、マリアの肘と膝を交互に見ながら、心配そうな目でそう言った。マリアは、少しはにかみながら首を縦に振った。
「そっか。それにしても、けっこうはえーな、マリア。」
「そ、そんなことないですよ。」
「いや、マジだって。マジな話、最初に戦ったお前が、俺に一番喰らい付いてきたからな。決勝の奴より、お前の方が全然歯ごたえあったぜ。」
そう言うと、イルさんは嬉しそうに笑った。でも、決勝も少し競っていませんでした？
「スタートでミスっただけさ。でなきゃ、あんな接戦になるはずが

ねぇ。」
　なるほど。それにしても、イルさんて、話し方がずい分と男っぽいな。女性なのに、一人称『俺』だし。
「イルさんは、どうしてこの大会に出場されたんですか？」
「んなもん、自分の実力を試したかったからさ。」
　イルさんは、自信たっぷりに言いきった。
「俺は体動かすの好きだし、負けん気も強くてさ。スポーツの世界じゃ、絶対に誰にも負けたくねーんだ。例え、どんな競技だったとしてもな。一緒にやってくれる奴があんまりいねーから、ほとんどこんな個人競技だけどな。」
「なるほど・・・つまり、イルさんは野球がしたいってわけね！」
　ミズホが、突然そんなことを叫んで立ち上がった。イルさん含め、全員がポカンと口を開けたまま、立ち上がったミズホを見上げている。ミズホはイルさんの方に近付き、イルさんの顔を正面に見据えてこう言った。
「イルさん、一緒に野球をやりましょう！あなたが、私達のチームには必要だわ！」
「や、野球だ？」
　イルさんは、ミズホの剣幕に目を丸くした。ミズホは、イルさんの手を握ってさらにまくし立てる。
「そうよ！私達のチームは、世界制覇を目標にしているわ。あなたの実力なら、きっと世界でも通用すると思うの。ね？一緒に世界を目指しましょ！」
　ミズホは、大きく開けた目をグイッと近づけ、イルさんの目を捉えて離さなかった。
「・・・」
　イルさんは、口を開けたまま、しばらく呆けていた。まぁ、無理もないか。さすがに、いきなりＯＫとはいかない。しょーがない、助け舟を出すか。と、俺が腰を浮かせた瞬間だった。
「イルさん。」

俺より先に、マリアが声をかけた。イルさんは、ゆっくりとマリアの方を向いた。
「返事は、すぐじゃなくても構いません。でも・・・私も、イルさんと野球が出来たら、嬉しいな。」
照れたように、それでいて無邪気に笑うマリア。あの笑顔は強力だ。マリアの親父さんもお袋さんも、よくあの笑顔にやられていた。
もっとも、この笑顔も万能じゃない。不思議なことにこの笑顔、男相手となると、マリアの親父さん以外には効果がない。一方で、女性相手には効果覿面だ。おそらく、バニルさんの協力をマリアが取り付けたのも、この笑顔を使ったからに違いない。
さて、そんな強力攻撃を受けたイルさん。その表情は、明らかに動揺し悩んでいる。イルさんはしばらく逡巡した後、俺達にこう言った。
「しばらく、考える時間をくれないか？俺一人じゃ、出せる答えじゃなさそうだ。」
「そう・・・分かったわ。いい返事、期待してる。」
ミズホはそう言うと、ポケットから紙を取り出した。なんだ？
「これ、私の家の住所。答えが出たら、いつでも家に来て。私かお姉ちゃんがいるはずだから。」
イルさんはそれを受け取ると、友達と約束があると言って、浜辺から出店の方へ戻っていった。それにしても、予めあんなものを用意しておくとは、ミズホも周到だな。
「イルさん、入ってくれるんやろか？」
「さて、こればかりはご本人の問題だ。我々は、気長に待つしかないだろう。」
ヒーリルの不安も、フローラの答えも一理あるな。さ、俺達は祭りに戻ろう。あと二人、助っ人を捜さないといけないからな。
祭りは二日目を迎えていた。昨日、イルさんと別れた俺達は、その後もローラーで助っ人を捜したわけなんだけど・・・まぁ、基本

的にグダってくるわけで。正直、助っ人探しは一割程度。ほとんど遊んでいた。
　ま、そんな状況を打開するべく、二日目の祭りに繰り出したわけなんだけど・・・
「あ、昨日の海鮮焼き見っけ！おじさ～ん！昨日のやつ三つ！」
　ミズホは完全に屋台に夢中。マリさんも同様だ。他のクラスメイトも、あっちこっちの屋台に散っている。何人かは、下の弟妹連れてきてるし・・・今日は活動ゼロだな、これじゃ・・・
「はぁ～・・・」
　俺が思わず、ため息をついた時だった。
「なにため息なんざついていやがる？」
　後ろから、ドスの効いた男の声がした。そこにいたのは、
「あ、お久しぶりです、キールさん。」
　この島の警察隊長、キールさんだった。四十前ながら、鍛え上げられた肉体は若々しい。イカツイ顔に似合わず優しい人で、義理人情に厚い。この島の誰からも尊敬されている一人だろう。
「おや、ベリーちゃんも一緒か。」
「こんにちは、ワタルさん。」
　横には、一人娘のベリーちゃんがいた。俺達と同じ学校で、初等二科の二年生だ。キールさんには甘えただけど、クラスの学級委員長を務め、なかなかしっかりしている。
「隣にそんな素敵なお嬢さん連れといて、ため息をつくもんじゃない。」
　キールさんは、マリさんをチラッと見てからそう言った。
「そんな、素敵なお嬢さんだなんて・・・」
　マリさんはやたらと照れて、体をウネウネくねらしている。今日は非番ですか？
「一応な。もっとも、祭りである以上、あちこちで諍いが絶えないだろうが・・・」
　休みのようで休みでない、そんな感じですか？

「あぁ。ま、立場上仕方ないがな。」
そう言って、キールさんは自嘲気味に笑った。そういえば、美人の奥さんは？
「女は女同士って奴だ。お前こそ、あの女みたいな弟はどうした？」
「あいつも、男は男同士ですよ。」
あいつのことだから、一人になるとナンパをされかねない。たまに間違えるバカがいるから、困ったもんだ。
「そういえば、ベリーから聞いた話だが、野球チームを作ったらしいな？」
「えぇ。そこの素敵なお嬢さんも、チームの一員ですよ。」
「もうやだ、ワタル君まで。」
マリさん、いつまで照れてんです？
「ごめんなさい、つい・・・あ、自己紹介が遅れました。キノムラ・マリと言います。あそこの屋台にいるのが、妹のミズホです。私達二人が、野球チームの発足人です。ワタル君達には、チームのことでお世話になりっぱなしで。」
「なるほど。俺は、キール・アーシュナント。この島の警察隊長を任されている。こいつは娘の・・・」
「ベリー・アーシュナントです。初めまして。」
そう言って、ベリーちゃんはペコリとお辞儀をした。相変わらず礼儀正しい。マリアとかには見習ってほしいよ。
「マリさん、だったな。俺も根っからの野球好きでな。チームには、期待させてもらうぜ。」
「ありがとうございます。」
マリさんが、キールさんにお辞儀をした時だった。
「お待た～！」
ミズホが、海鮮焼きを数個抱えて戻ってきた。買い過ぎだ。
「食べるでしょ？」
ミズホは一つパクつきながら、俺に海鮮焼きを差し出してきた。
まぁ、言われれば食べるけど。

「はい、お姉ちゃんも。」
「ありがとう。」
笑顔で受け取るマリさん。さて、ミズホにキールさん達を紹介しようか。そう思い、ミズホに話しかけようとした時だった。
『ドン！！！』
「へぶぅっ！」
「キャ！」
壮絶な音と共に、ミズホが変な声を上げて吹っ飛んでいった。そのすぐ横には、ミズホを吹っ飛ばした物体が、正確には女性が倒れていた。二人の間には、ミズホの分であろう海鮮焼きが落ちている。俺達は、倒れた二人に声をかけた。
「大丈夫？」
真っ先に声をかけたのは、ベリーちゃんだった。いやー、そんなに大丈夫には見えないな。ミズホ、生きてるか？
「勝手に殺さないでよ！」
おう、元気だ元気だ。さて、こちらの女性はどこのどなたなんだか・・・
「あ、足ケガしてる。」
ベリーちゃんが、女性の足首を指差してそう言った。転んだ時にでも出来た・・・わけじゃなさそうだ。
「こいつは・・・」
キールさんも気づきました？これ、明らかに刃物か何かで切りつけられたような傷です。
「だな。」
キールさんの目つきが変わった。仕事モードだ。
「マリさん、治癒魔法で応急手当を。」
「ベリー、救護所から人呼んでこい。」
「ＯＫ。」
「分かった。」
ベリーちゃんが救護所に走り、マリさんが応急手当を開始した。

さて・・・
「俺達は犯人退治と行きましょうか。」
「あぁ、そうだな。」
俺とキールさんの視線の先には、チンピラみたいな奴が二人。上半身裸のグラサン男に、派手な色の髪をピンピンに立たせた男。グラサン野郎は素手だけど、派手な方はナイフをシャンシャン言わせている。
「ワタル、腕の刺青を見ろ。」
腕の刺青・・・そこには、赤い蛇の紋章。
「なるほど・・・レッドスネイクの奴らか。西側諸国があんたらのシマだろうが。」
そう言って、俺は剣を抜いた。ま、シマ争いに来たわけじゃないだろう。大方、狙いはあの女性。
「キールさん、あっちのグラサン、任せていいですか？」
「分かった・・・言っておくが、殺すなよ。」
「心得ています・・・」
さて、久々に剣を交える時が来たな・・・あいつの実力、どれほどのもんか・・・
「兄貴、ありゃワタルですぜ？」
「フフフ、これは好都合だ。ついでにその首、頂かせてもらうとしよう。」
おうおう、俺の名前は相変わらずご存知かい。それにしても、あのグラサンの方が兄貴分か。
「兄貴、ワタルは俺がやるぜ。」
「いいだろう。こちらの男も、それなりに楽しませてくれそうだ。」
グラサンの男は、そう言って拳をポキポキ鳴らした。威勢のいいこった。
「んじゃ、行っくぜぇぇぇぇぇぇぇぇぇい！！！」
そう言って、ナイフ男は低い姿勢で突っ込んできた。
『キン！』

首筋を一気に切り裂きに来た！一撃必殺ってか！？
「おらおらおらおらおらおらおら！！！」
その後も、右から左からナイフが飛んでくる。剣で捌くよりも、回避した方がいいな。にしても、けっこう太刀筋が速い。ナイフの出てくる角度、タイミングも上手い。けっこうな使い手だ。気を抜いたら、殺られる！
『キンキン！』
剣で捌くと同時に、少し距離を取る俺。群集は遠巻きに見ている。キールさんは、ガップリ四つで組み合ってるな。あっちに援護はいらないとして・・・殺すな、ね。これほどの腕前じゃ、そんな生ぬるいこと言ってたら、マジにこっちが殺られかねない。
「しゃーねー・・・ちっとばかし、本気で行くか・・・」
俺は、剣に魔力を集中させた。あいつの得物と動き、その両方を封じる手は、これくらいしかない。勝負は、今から三十秒！
「行くぜ！」
俺は準備を終えると、一目散にナイフ男めがけて突っ込んだ。狙うのは、ナイフの根元一点！
「そこぉ！」
『ガキン！』
ナイフの刃が折れた！よし、このまま一気に！
『ヒュッ』
「うわ！」
もう一歩踏み出そうとした俺の顔めがけ、何かが飛んできた。俺はそれを左腕で庇いながら、距離を取った。左腕を見ると、そこには小さく無数の針。
「仕込み針か・・・」
やってくれるじゃん。
「そっちもな・・・まさか、刃が砕かれるとは・・・許さねぇ！」
まだやるってか、上等・・・
「隊長～！」

「ん？」
後ろから、何やら叫びながら、十数人の人間がこっちに向かってくる。その先頭は、救護所に向かったベリーちゃんだ。なるほど、救護所行くついでに、警察隊も呼んだってわけか。
「兄貴、警察隊ですぜ？」
「あの人数じゃ・・・さすがに分が悪いか・・・退くぞ！」
「うぁ！」
グラサン男はそう叫ぶと、腰を思いっきり捻ってキールさんを投げ飛ばした。見かけ倒しじゃないってわけね。
「ワタル！今日は退いてやるが、次はその首諸共、女の命を頂くからな！それまでせいぜい、カッコいい騎士を演じてるがいい！」
ナイフ男はそれだけ言い残すと、煙玉を撒き散らした。
「くそっ！」
何個ばら撒きやがった！？尋常じゃねーぞ、この煙！
「ワタル！なんとかしろ！」
「言われなくても・・・吹き荒め！風の精霊よ！踊り狂う台風！」
『グオォォォォォォオ！』
風が渦を巻き、ものの数秒で煙は消え去った。だけど、そこにあの二人の姿はなかった。逃げ足の速い野郎だぜ。
「隊長！」
警察隊の服に身を包んだ十人ほどの人間が、キールさんの前に整列する。一番手前で敬礼しているあの人が、あの隊のリーダーか？
「隊長、お怪我はありませんか？」
「あぁ、大丈夫だ。」
キールさんが無事だと分かり、少し安堵の色を浮かべる警察隊。
「先ほどの奴らは、何者でしょう？」
「レッドスネイクだ。どうやら、その女性を追ってきたらしい。」
そう言って、キールさんは倒れている女性に目をやる。マリさん、容態は？
「応急処置はしたわ。あとは、救護所でちゃんと治療すれば大丈夫。

」
　そうですか。良かった・・・
「隊長、非常線を張りますか？」
「あぁ、勿論だ。確か、祭りの警護には二番隊と三番隊が就いていたな・・・よし、お前ら一番隊は、すぐに四・五番隊を連れて港へ急行しろ！犯人は二人組み！背の高い、筋肉質の上半身裸でグラサンの男と、緑色の髪の男だ！緑の髪の奴は武器を持っている！まだ遠くへは行っていないはずだ！警察隊の誇りに懸けて、全力で犯人逮捕に当たれ！いいな！？」
『了解！！』
　一番隊の人はそう叫ぶと、一目散にどこかへと走っていった。それにしても、的確な指示と情報伝達。さすがですね、キールさん。
「曲がりなりにも、隊長を務めさせてもらっているんだ。これくらい、出来ないとな。ワタル、俺はこれから港に行って指揮を執る。ベリーのこととあの女性、任せてもいいな？」
「了解です。お気をつけて。」
　俺が敬礼すると、キールさんも敬礼を返し、そしてベリーちゃんに一言お許しを貰い、港の方へ走っていった。さて、
「俺達は、救護所で彼女の意識が戻るのを待とう。」

「メルア、容態はどうなんだ？」
「気を失ってはいるけど、命に別状なし。足のケガは大したことないし、お姉さんの応急処置のおかげで、傷も残らないと思うし。意識が戻らないのは、張り詰めていた緊張の糸が切れて、一気に肉体的疲労が襲ってきたから。衰弱しきっているしね。意識が戻っても、しばらくは絶対安静でよろしく。」
　そう言って、救護所の医師であるメルア・ソレスタはこっちを向いた。にしても、君がここにいたとはね。
「まったくだよ。今日は本来なら休みだってのに、人手が足りないから手伝えって言われちゃってさ。ま、バイト代出るからいいけど。

」
ハハハ、ゲンキンな奴。
「ねぇ、ワタル。この人、ホントに医者？」
ミズホが、俺の肩越しにメルアを見ながらそう言った。そうだけど？
「ずい分若い医者ね。」
そりゃ、俺達より年下だからな。
「と、年下！？いったいいくつよ！？」
「あたし？十四だけど？」
「じゅ、十四って・・・なんでそんな歳で医者やれんのよ！？」
「落ち着けミズホ。ここは病院だ、騒ぐ場所じゃない。それと、その疑問にはちゃんと答える。」
俺がそう言うと、ミズホは渋々と、近くにあった椅子に腰掛ける。
さて、
「まずは彼女を紹介しよう。メルア・ソレスタ。町外れで診療所をやっている、天才医師だ。」
俺はあえて、天才の所を少し強調した。
「まぁ、ミズホやマリさんみたいに、イーハンの人は驚くだろうな。でも、彼女は国家試験をパスした、正真正銘の医者だ。この国は、イーハンと違って飛び級が認められている。かなり、基準が厳しいけどな。その飛び級制度により、メルアは十二で学校を卒業。独学で国家試験に一発合格。というわけで、十四の医者が誕生ってわけだ。」
「へぇ～・・・すごいわね～・・・」
マリさんは、ただ感心したようにそう言って、ミズホは呆けたまま動かない。
「ワタル、その二人はイーハンの人なわけ？」
「そうさ。ま、イーハンは騎士の国であり、医療の国でもある。イーハンで医者になるってのは、この国で飛び級が認められるくらい難しいらしい。だから、君が不思議な存在なんだろう。」

「なるほど。」
メルアは口に咥えたシャーペンを上下に動かしながら、クルッとした丸い目で、ミズホとマリさんを見ていた。
「あたし、メルア・ソレスタ。魔法で治せないケガや病気したら、ウチおいで。格安で診てあげる。」
「どうも。私、キノムラ・ミズホ。」
「姉のキノムラ・マリよ。その時はよろしく。」
格安ね・・・よく言うよ。
「あ、そうだ・・・ワタル。」
「ん？どうした？」
俺ならケガしてないし、基本的にいたって健康だけど？
「んなもん、見りゃ分かるよ。そうじゃなくて、ルアーニから頼み事されてんだけどさ。」
ルアーニから？それって、野球チームに関係すること？
「うん。そこの二人、チームの中心なんでしょ？だったらついでに聞いといて。この前ルアーニに、野球チーム専属の医療スタッフを頼まれちゃってね。」
医療スタッフ？
「うん。野球する上でケガしないなんてありえないだろうからって。んで、あたしのとこの看護士から一人、そっちに派遣するからよろしく。」
「ホント！？」
俺より先に、ミズホがメルアに詰め寄った。椅子ごと素早く移動したな・・・
「うん。つーことで、練習とかではバンバンケガしちゃって。その子、ウチで二番目に要領のいい子だから。」
一番はくれないわけか・・・
「そりゃそうでしょ。あたしが困る。」
「んなことだと思ったよ。」
相変わらず、頼みごと引き受けても、自分の都合次第の手助けだ

な。ま、それでも助かるから不思議なんだけど。
「うう・・・・・・・・・うう・・・・」
不意に、呻き声のようなものが聞こえた。その場にいた人間の視線が、全て、ベッドで眠る彼女に集中する。メルアがサッと近寄り、彼女に声をかける。
「気が付いた？喋れる？私の声、聞こえる？」
メルアの呼びかけが聞こえたのか、ベッドで眠っていた彼女は、ゆっくりと目を開けた。少し虚ろな、自分がいつから眠っていたのかも分からない、とでも言いたげな目をしていた。その目は、俺達と違って青かった。それだけで、彼女が西の大陸の人間であることが分かる。
「こ、ここは・・・？」
「祭りの救護所。安全な場所だから、安心して。あたしは、メルア・ソレスタ。この島で医者をしている。」
「祭り・・・？私は、いったい・・・」
「いろいろ混乱しているだろうけど、今はゆっくり休んで。あんた、ほとんど何も食べてないでしょ？点滴中だから、終わるまではゆっくり寝てるといいよ。」
「・・・・・・」
彼女は、一瞬だけメルアを見た後、ゆっくり息を吐きながら目を閉じた。安心したんだろうな。
「あたしは、彼女の目が覚めるまでここにいるけど、みんなはどうするの？」
「俺は残るぜ。彼女から話聞いて、キールさんに報告しないといけないからな。」
「じゃあ、私も残る！」
「ウチも！」
マリアとヒーリルが、元気よく手を挙げた。別にいいけど。マリさんとミズホは？
「私は、お祭りに戻るわよ。まだまだ遊び足りないし。お姉ちゃん

は？」
「私も、そうしようかな。まだまだ、お腹に余裕はあるしね。」
そう言って、マリさんはお腹をポンと叩いた。分かりました。んじゃ、お二人はみんなと合流してください。詳しい話は、後日改めて。
「お願いね、ワタル君。」
「んじゃね！」
ミズホとマリさんは、病室を足早に出て行った。
「俺達も、外で待たせてもらうぜ。メルア、その人が目を覚ましたら呼んでくれ。」
「ＯＫ。」
俺はメルアの返事を聞くと、病室を後にした。マリアとヒーリルが続く。
救護所を出ると、日がほぼ真上に来ていた。そろそろ昼か。
「ウチ、なんか買ってくるわ。二人とも、何がエエ？」
「なんでもいいよ。」
「俺も。」
「了解や。ほな、すぐ戻ってくるわ。」
ヒーリルはそう言うと、小走りに屋台の方へ消えていった。残された俺達は、近くにあった椅子に腰掛ける。さて、ヒーリルは何を買ってくるんだろうか・・・
「なんだか、大変なことになっちゃったね・・・」
マリアが、呟くようにそう言った。ま、なにかとな。
それにしても、なんだってあの人は、レッドスネイクなんかに追われていたんだ？見たところ、大きな秘密を抱えているようには見えないのに・・・
「あの人、何者なのかな？」
マリアも、どうやら俺と同じことを考えていたらしい。
「確かに、何者やろね？」
人数分の昼飯を抱えたヒーリルも、ずっとそれを考えていたよう

だ。俺達はその後、彼女の意識が戻るまで、取り留めのない妄想を語り続けた。

空がオレンジ色に染まりだし、祭りもそろそろ佳境に入ろうかという時、ようやくメルアから声がかかった。どうやら、彼女が話せる程度にまで回復したらしい。

病室に入ると、そこには、ベッドの上でホットミルクを飲んでいる彼女の姿。彼女は、俺達が入って来たことに気づくと、ホットミルクに向けていた目をこっちに向けた。その青い瞳は、大きく丸い。その小顔に占める瞳の割合は、マリアやメルアよりも上だろう。長い三つ編に華奢な体。足首に巻かれた包帯が痛々しい。

「もう、起き上がって大丈夫なんですか？」

俺は近くの椅子に腰掛けながら、彼女に尋ねた。

「はい、なんとか・・・」

彼女は、か細い声で、でも笑顔でそう言った。

「よろしければ、お名前を聞かせてくれませんか？」

「・・・私は、アリス・ランフォードと申します。」

「アリスさん、ですね。僕は、クリョホーセン・ワタルと言います。以後、お見知り置きを。後ろにいるのは・・・」

「シュリアロ・マリアでーす！」

「ハイムーンド・グリーン・ヒーリルケル言います。ヒーリルって呼んでください。」

「・・・という二人で、僕の友達です。」

いつの間に俺との距離を詰めたんだ、二人は？

「マリアさんと、ヒーリルさんですね。アリス・ランフォードです。この度は、危ない所を助けていただき、本当に感謝しています。」

アリスさんはそう言って、深々と頭を下げた。礼儀正しい人だ。

「そんな、私達は何もしてませんよ。」

「そうです。悪い人らをやっつけたんは、ワタル君です。」

「そうなんですか、ワタルさん？」

「いや、僕一人ってわけでもないんですが・・・」
キールさんやマリさんがいてくれたし、ベリーちゃんの行動も立派だった。俺一人の手柄じゃない。
「でも、一番活躍したのはワタル君だよ。」
「せやせや。謙遜せんでエエで。」
謙遜とかじゃないんだけどな。
「いずれにせよ、私が今こうして生きていられるのは、皆さんのお陰です。本当にありがとうございます。」
「いえいえ〜。」
「なんでマリアちゃんが照れてんの？」
ヒーリルが軽くツッコミを入れたところで、俺は本題へと切り込んだ。
「アリスさん。あなたはなぜ、あの二人に追われていたんですか？いや・・・レッドスネイクにと言った方が適切でしょうか？」
レッドスネイクの名前を出した時、アリスさんの表情が僅かに曇った。
「レッドスネイクは、西側諸国を拠点とする一大犯罪組織。が、言い換えれば、その活動は西側諸国のみに限定されている。多少のことなら、自分達のシマから逃げ出した人間など、あいつらは相手にしない。でも、あなたに対しては違う。教えてください、アリスさん。あなたが奴らに追われる理由は、なんなんですか？」
俺はそこまで一気にまくし立て、アリスさんを見た。アリスさんは、しばらくコップに目を落としていた。やがて、そのコップを端に置くと、アリスさんは首の後ろに手を回した。何をしているのかと見ていると、胸元からネックレスが姿を現した。綺麗な紫の宝石が付いた、ありふれたネックレスだった。
「これが、あいつらの狙っている物です。」
アリスさんは、ネックレスを握りしめながらそう言った。そのネックレス、それほど高価な物なんですか？
「このネックレスは、我がランフォード家に代々伝わる、ケルシー

のネックレスです。」
「ケルシー？」
マリアが首を傾げる。知らないのか？
「うん。」
自信たっぷりに頷くなよ・・・
「ケルシーってのは、世界の北側のごく一部でしか採れない宝石だ。別名、紫の真珠と呼ばれる、超セレブアイテム。これほどの大きさとなると、石だけで軽く一千万ゼラは下らないな。」
「い、一千万ゼラ！？」
だから、病院で騒ぐな。
「でも、あのレッドスネイクが、そのネックレスを狙って、あそこまでするん？」
ヒーリルの意見には同感だ。確かに、このネックレスの価値は高い。が、だからってあそこまでするとは思えない。
「アリスさん、あいつらがこれを狙う理由は、なんですか？」
「・・・先祖の宝です。あいつらの狙いは、おそらくそれです。」
先祖の宝・・・このネックレスが、そこへ繋がるヒントを隠し持っていると？
「と言うよりは、このネックレスが、先祖の宝へ繋がる扉を開ける鍵であると、祖父から教えられております。」
おじいさんから・・・そうですか・・・
「私の祖先は、世界中を旅するトレジャーハンターだったそうです。その旅の最中、様々な財宝を手に入れたと聞きます。ですが、祖先はそのほとんどを、国のどこかに隠したそうなのです。」
「国の・・・そういえば、アリスさんは西側のどこのご出身なんですか？」
「私は、ケルムナ帝国の人間です。父は、貿易会社をやっております。」
貿易関係・・・それに、ケルムナ帝国か。西側最大の国土と軍事力を誇る大国だ。

「じゃあ、そのレッドスネイクとやらの狙いは、その隠し財宝ってわけだ。」
「えぇ、おそらく・・・・」
メルア、心なしか目が輝いてるぞ。
「いやー、やっぱ夢あるじゃん。」
夢ね・・・しかし、ケルシーの宝石を鍵にするくらいだ。そこには、よほどの財宝が眠っているに違いない。
「アリスさん。その財宝がどれほど価値のある物か、ご存知ですか？」
「詳しい所までは存じませんが、祖父の話では、そこには『神の書』があると。」
『神の書！？』
これにはさすがに、全員が棒立ちになって声が揃った。
「・・・って、なんだっけ？」
いや、マリアだけは意味が分かっていなかったらしい。この前、歴史の授業で習ったろうが。
「そうだっけ？」
首を傾げるマリア。見かねた俺は、説明を始めた。
「あのな、マリア。『神の書』っていうのは、かの昔、この世界を創造した世界最初の神、セイラムが記したとされる、世界の理が書かれた書物だ。世界のどこかにあると言われ、様々なトレジャーハンターや歴史学者が捜し求めたが、まだ誰も目にしたことがない。でも、それは間違いだったみたいだな。アリスさんのご先祖は、はるか昔にそれを見つけ、ケルムナ帝国のどこかに隠した。」
歴史的にとても価値のある代物だ。欲しいかと言われれば、俺も興味がある。
「でも、なんだってそんな物、レッドスネイクが欲しがるんだ？あそこのボスは、歴史学者かなんかか？」
俺は、思わず天を仰いで考え込んだ。すると、アリスさんが声をかけてきた。

「ワタルさん。私は祖父から、『神の書』について、このように伝え聞いております。『神の書』を手にした者は、世界を統べる力を得ると。」
世界を統べる力？・・・そんなものが、手に入るんですか？
「そう、聞いております。絵空事と思われるかも知れません。ですが、祖父は私に、嘘をつくような人ではありません。」
そう言ったアリスさんの目は、さっきより力がこもっていた。どうやら、おじいさんに対する信頼は絶対みたいだ。
「分かりました。その話が本当だとすれば、レッドスネイクが狙う合点がいく。自らを裏の世界の頂点に立たせるためか、あるいは表を陰で操る存在になるためか・・・」
「表を陰で操る？」
マリアがまた首を傾げる。
「この前、ルアーニから聞いた話を踏まえての推測だけどな・・・ケルムナ帝国の今の王様、かなりのご高齢らしくて、王宮じゃ後継者争いが水面下で始まっているらしい。その後継者候補の中の誰かが、レッドスネイクと繋がりがあるとする。そうなると、その人物が王となった時、レッドスネイクが意のままに表を操れる、ってわけだ。」
これこそ、絵空事もいい所だけどな。
「なんにせよ、レッドスネイクがアリスさんを狙っている理由ははっきりした。俺はキールさんにこのことを話すけど・・・『神の書』の件に関しては、今ここにいる人間だけの秘密にしよう。」
「なんでなん？」
ヒーリルが、不思議そうに俺の顔を覗き込みながら聞いてきた。
「そんな話が他の裏組織に知れたら、こぞってアリスさんを狙ってくるだろ？レッドスネイクだけでも、充分に危険な相手だ。敵が少ないに越したことはない。」
「あぁ、そっか・・・分かった。ウチラだけの秘密や。」
「了解。」

「患者の秘密は守るよ。」
よし。んじゃー、後はアリスさんをどうするか、だな。身の安全を確保するには、やっぱ警察の保護下が一番か・・・と、俺がアリスさんの今後を考え始めた時だった。
「ワタル～！」
ミズホの叫び声が、病室に響いた。病院で騒ぐなって、ついさっき言ったはずだぞ？
「いや～、ついね～。」
「ワタル君、あの子の様子はどう？」
マリさんも一緒でしたか。
「お、メルアじゃねーか。」
あれ？イルさんも一緒なんですか？それに、後ろの女性は？
「お、ワタルか。これから俺達二人、よろしく頼むな。」
よろしくって・・・
「イルさん、チームに入ってくれるんですか！？」
マリアが、キラキラと目を輝かせながらイルさんを見上げる。
「おう。ついでに、俺のダチもな。」
「ダチって、その人ですか？」
俺が目をやると、イルさんの後ろに立っている女性は、少し照れながら頭を下げた。そして、自己紹介を始めた。
「初めまして。トランシルバ・マクネリーベと言います。トレーシーって、呼んでください。」
「トレーシーとは、古い付き合いでな。チームに入るかどうか相談したら、私も入りたいって言われちまってさ。んで、俺も決心がついたってわけ。」
そうだったんですか。歓迎しますよ、お二人さん。さて、これで残るはあと一人か・・・
「あの、ワタルさん。」
アリスさんが、少し不安そうに俺を呼んだ。振り返ると、そこには、なにやら不思議そうに目を丸くした彼女の顔。どうかしました？

「チームって、なんのことですか？」
「あぁ、女子野球のチームですよ。ここにいるメンバーは、僕を含め、全員がチームの関係者です。それがなにか？」
「あの・・・そのチーム、私も参加していいですか？」
「え？・・・・」
不意の申し出に、俺の思考は一瞬止まった。が、すぐにミズホが食いついた。
「もちろん大歓迎！名前は？」
「ア、アリス・ランフォードと申します。」
「アリスね。私はミズホ！あっちがお姉ちゃんで、横にいるのはチームメイト多数よ。」
「略すな！」
ミズホにツッコミを入れるイルさん。あの人もツッコミができるのか・・・
「あなたが入れば人数ピッタリ！助っ人探しは完了よ！」
「は、はぁ・・・」
ミズホ、アリスさんが困ってるぞ。
「それにしても、アリスさん。どうしていきなり？」
「あの・・・助けていただいたお礼がしたいんです。ワタルさんに助けていただいたこの命、せめて、ワタルさんのお役に立てればと思いまして。」
お礼だなんて・・・照れるな、ちょっと。そんな言い方、あんまりされたことないし。
「あの、ご迷惑でしょうか？」
「いえいえ、とんでもない。ミズホの言ったとおり、歓迎します。共に頑張りましょう。」
「よかった・・・あと、実はもう一つ理由が。」
もう一つ？
「実は・・・チームに入れば、ワタルさんの傍に、ずっといれるのかなって思って・・・」

「僕の？・・・・」
まぁ、だいたいの場合はそうなるだろうけど・・・
「はい・・・先ほどから、ワタルさんとお話をしていて・・・私、ワタルさんが好きになったみたいで・・・」
「え？」
『えええええ～～！？』
俺以上に驚きの声を挙げたのは、マリアとヒーリルだった。
「大好きなワタルさんのお役に立てるのでしたら、このアリス・ランフォード、全力でお手伝いさせていただきます。」
アリスさんはそう言うと、俺に満面の笑みを向けた。あ～っと・・・俺はどう返せばいいんだ？
「アリスさん！それは宣戦布告とみます！」
不意に、マリアがそんなことを叫んだ。ヒーリルも、普段見ないような剣幕で、アリスさんを見ている。
「私だって、ワタル君が好きだもん！この勝負、受けて立つわ！」
「ウチもや！」
「・・・分かりました。全力で、お相手させていただきます。」
三人の間に散る火花・・・が見えるわけじゃないけど。とにかく、そんなバトルがいきなり始まった。
「いや～、これから大変だね、ワタル。」
そう言うメルアは、とても楽しそうに笑っていた。

第四章～祭り～（後書き）

拙い文章ですみません

第五章～全員集合？～

第五章

全員集合？

祭りの翌日。助っ人が全員集まり、週末からは練習ができると、ミズホは朝から上機嫌だ。他の女子も、今日は心なしかテンションが高い。

その一方で、雁首並べて悩んでいるのは、俺達男子だ。ルアーニの助力により、チームの裏方はかなり集まった。が、集まったのはいわば人だ。練習場の確保、道具の確保、ユニフォームの製作・・・いわゆる、物資がまったく揃っていない。

が、人数が揃ってないから、という油断と安心がどこかにあった。それが何よりの原因だろう。人数が揃ったことで、今週末という期限がいきなり付いてしまった。本来なら、焦ってあたふた動き回るところだろう。が、人間は不思議なもので、焦りすぎると逆に動けない。今の俺達も、まさにその状態だった。でも・・・

「黙っててもっ、埒明かないか・・・」

俺はそう呟くと、席を立って、教壇に立つ。男子の視線が、自然と俺に向けられる。

「まず、現状を整理しよう。」

俺はそう言って、黒板に次のことを書いた。

『一、　練習場の確保』

『二、　道具の調達』

『三、　ユニフォーム』

『四、　スコアラーの発見』

『五、　応援団の結成と、応援団長』

ふむ・・・これくらいか？

「ここに書いたのは、今、俺達がやらなくちゃいけないこと・・・

と、俺が思っていることだ。」
「んなこと、言われなくても分かる。」
そう言ったのは、親友のマグナだ。漁師の息子で、いつも眠たそうな目をしている。
「じゃあ、どうするんだ？」
「・・・そうだな・・・練習場は、やっぱ、あそこしかないんじゃないか？」
あそこ・・・町外れにある、ボロボロの廃屋みたいな球場だ。リンスさんが所属していた、ラルック・レイナーズの本拠地。チームがなくなってからは、まったく手入れがされていない。
「それはそうなんだが・・・勝手に使うとまずいだろ。」
一応、まだ誰かの所有物になっているはずだ。
「それに、グラウンドだけ使えるようにしても、スタンドやロッカーとかだって、大幅な修繕が必要だろ？」
ロッカーじゃ、幽霊が出るなんて噂もあるくらいだしな。怖がりマリアは、特に嫌がるだろう。
「そこらへんは、俺のとこに任せてくれないか？」
そう言ったのは、大工屋の息子であるファンクだった。
「親父の腕は確かだし、若い衆の人達もいい人ばかりだ。仕事の出来は、保証するぜ。」
そうか。んじゃ、それはファンクに任せる。土地の所有権は、俺がキールさんに聞いとくよ。
「分かった。」
さて、次は道具の確保か。
「ポジションが決まっていない今の段階じゃ、どのグローブをどれだけ用意したもんか、分からんな・・・」
マグナの言うとおりだ。なにせ、一部を除いて、ほとんどが野球未経験だ。適性は、練習の中でしっかり見極めるしかない。それまで、全員が試行錯誤だろう。
「とりあえず、俺達が使っていた奴を持ち寄るしかないか・・・」

そう呟いたのは、俺達の中で一番の野球好きであるスライだった。スライは、どれくらい持ってる？
「グローブは二つ三つ・・・バットはないな・・・女子野球は、専用の金属バットの使用が義務付けられている。そればっかりは、調達するしかないだろ。」
女子と男子で、バットが違うのか？
「あぁ、女子の方が少し軽いんだ。男子のプロはそもそも木製だし。アマチュアの金属より、軽かったはずだ。」
そうか。他には何がいる？
「ボールが大量に・・・これも、ちゃんとした公式球を用意した方がいいだろう。グラウンド整地用のトンボに、防球ネット・・・野球は、試合にも練習にもたくさんの道具がいるからな。すぐに用意できないのは、スパイクとかだろう。足のサイズを測って、用意する必要があるからな。他にもベースとか、ライン引きの台車・・・」
あぁ、そこらへんでいい・・・聞いてて、目の前が真っ暗になりかけた。どんだけ用意すんだよ・・・スライ、それらを調達する当ては？
「バットやボールは、スポーツショップに行けばある。あそこはガキの頃から顔馴染みの店だ。なるべく値切ってみせる。グローブは、みんなが持ってきた物を見てから判断するよ。トンボやベースは・・・球場のどこかに転がっているかも知れない。スパイクは、これもショップだな。それ以外も、島中捜せばどっかにあるだろ。問題は、それらを調達する金だな。」
女子から集めるか？
「それが妥当だが・・・必要な物が分かってから、そこは計算してみる。」
分かった。じゃあ、道具に関してはスライに任せる。
「了解。」
あいつに任せれば、なんとかなるだろう。さて、次はユニフォームか。

「これは、町の仕立屋に任せればいいだろ？」
マグナが、ややぶっきらぼうにそう言った。そうだな。いくつかのサイズを作ってもらって、後はみんなにサイズ聞いて・・・
「でも、デザインとかはどうするの？」
クラス一のチビ助、ヘンダーソンが不安そうに尋ねる。デザイン？
「うん。勝手に僕らで決めちゃったら、みんな怒るんじゃないかな？」
じゃあ、どうするんだ？
「デザインの案を募って、みんなで話し合って絞り込もう？決まったら、人数分のユニフォームを作ってさ。仕立て屋さんに関しては、僕に任せてよ。」
そう言って、ヘンダーソンは軽く胸を張った。あいつは、クラスで一番器用だからな。そういう情報は、あいつが一番正確だろう。
「じゃあ、任せるぜ。」
「任された。」
よし、次はスコアラー・・・いまさらなんだが、すっかり忘れていたな。
「選手が集まったことに浮かれて、女子の奴らも忘れていたみたいだからな。」
マグナが、ため息混じりにそう言った。ま、女子を責めるわけにもいかないだろ。俺自身、ついさっき思い出すまで、マジに忘れていた。
「スコアラーがいないんじゃ、エントリーも出来ないからな。ある意味、一番の急務だ。」
スライも、いつになく真剣な目でそう言った。
「一からスコアラーを育てるの？それとも、経験のある人？」
ヘンダーソンが、俺の目をジーッと見ながら、不安そうにそう聞いてきた。
「そりゃ、経験のある人がいいだろうが・・・一から育てるったって、誰がそんな知識あるんだ？」

そんな知識があるなら、育てる前にその人にスコアラーを頼みたいよ。
「それもそうか・・・」
とりあえず、経験者優先で捜そう。万が一見つからなかった場合、新たな人材を見つけて、その人に猛勉強してもらうしかない。
「猛勉強って・・・ハウツー本でも読ませる気か？」
他に方法がないだろ？とりあえず、その方向で何とかしよう。最後に、応援団だな。
「ある意味、一番の大所帯だからな。」
マグナの言うとおり、応援団は人数がかなり集まっている。みんなの家族は勿論、姫のとこのメイドさんに、エドさんの親衛隊・・・ポーラさんの応援には、碁会所とか将棋館の人。キールさんの口ぶりからして、警察隊の人もそれなりに・・・トレーシーさんは、水泳のトレーナーをしていたらしいから、そこの生徒さん。商店街の人気者と化したミズホのお陰で、そこら辺も集まってくる・・・
「人数はハンパないな。が、これらをまとめる応援団長となると中々・・・」
重責なだけに、責任感の強い熱血漢な人がいいけど・・・
「適任、誰かいるのか？一番適任そうな人は、選手側にいるんだぞ？」
ファンクが、怪訝そうにそう言った。おそらく、ミーフィーさんのことを言っているんだろう。確かに、応援団長という大役も、ミーフィーさんならこなせるだろう。
でも、ミーフィーさんは選手だ。当然、団長を任せるわけにいかない。ミーフィーさん以外に任せるとなると・・・適材が思い浮かばない。
「太鼓係はいるのにな・・・」
マグナが、ポツッとそう呟いた。おそらくそれは、
「俺のこと？」
マグナを軽く睨む、カナシだろう。カナシの親父さんは、祭りで

毎年太鼓を叩いていた。腰を悪くした今、親父さんの代わりはカナシしかいない。
「カナシ君なら、大丈夫だね。」
ヘンダーソンが、ホッと胸を撫で下ろす。ヘンダーソンとカナシは、チビ助同士でとても仲がいい。
「太鼓ぐらいはするけど、応援団長は絶対やらないから。」
カナシはそう言って、俺をしっかり睨んできた。ま、お前ならそう言うと思った。それに、
「お前が太鼓係ってのを聞いて、思い出した。応援団長にピッタリの人材・・・ロップルさんだ。」
「え！？ちょ！？」
案の定、カナシが慌てだした。無理もない。ロップルさんは、カナシの実のお姉さんで、カナシの天敵だ。傍から見ると、仲のいい姉と弟がじゃれ合っているだけ。が、それがカナシに対する本気のアプローチだとは、俺達男子以外は知る由もない。女子でさえ気づかないからな。
でも、ロップルさんは気さくだし、何より、先頭に立つだけの責任感とカリスマ性を持っている。それに、人を乗せたりするのも上手いしな。あの人に唆されて、ガキの頃は何度も危ない橋を渡ったよ。
「カナシが太鼓係をやるって言えば、喜んでＯＫしてくれるだろうぜ。」
そう言って、マグナが楽しそうにクスクスと笑う。カナシは驚いたまま、俺達を見渡している。まぁ、俺達としては、ロップルさんで満場一致なんだけど？
「・・・ハァ～・・・」
カナシが、小さくため息をついた。諦めた、と見ていいのか？
「あぁ、諦めたよ。ったく、なんだって姉ちゃんなんだか・・・説得には、ワタルが当たってよ。俺は嫌だかんな。」
へーへー、それくらいはお安い御用だ。さて、これで大体のこと

は決着ついたな。とりあえず、球場の修繕はファンク担当だ。
「りょーかい。なるべく早く、地権者を見つけてくれよ。」
努力する。ユニフォームは、ヘンダーソンに任せていいな？
「お任せあれ。」
頼むぜ。カナシは、ロップルさんと一緒に応援団の担当な。今日はこの後、お前の家に寄らせてもらうぜ。
「・・・・・」
無言の承諾だな。後の奴らは、スライとマグナを中心に道具の調達だ。
「ワタル、スコアラーは？」
それは俺が当たる。そっちは道具、頼んだぜ。
「あいよ。バッチリ、値切り術を見習わせてもらうさ。」
よし、今日は解散。この週末には、女子をアッと言わせるような結果を出そうぜ！
『おう！！』
野郎の図太い声が、教室にこだまする。さて、今週も忙しくなりそうだ。

学校から歩いて十分ほど。そこに、カナシとロップルさんの住んでいる家がある。ありふれた、レンガ調の家だ。母親は航海士で、ほとんど家に帰ってこない。腰の悪い父親は、病院に入院中。
「ただいま・・・」
「おじゃましまーす。」
俺の声が聞こえたのか、それともカナシの気配を察知したのか、いずれにせよ、二階から誰かが早足で降りてくる。まぁ、おそらくロップルさんだろう。
「カナシ～！おっかえり～！」
ハートマークを十個は抱えているような笑顔で、ロップルさんはカナシに抱きつこうとした。が、
『ムギュ』

カナシに寸前で抱擁を避けられたロップルさんは、そうとは気づかず、俺に思いっきり抱きついてきた。
「ちょ、ロップルさん！俺ですよ！？」
「え？・・・あ、ワタル君。いらっしゃい。」
どうも。それより、相手を間違えてませんか？カナシはあっちですよ。
「カナシが逃げるのは、いつものことよ。その内捕まえるから、大丈夫。」
その内、ね・・・カナシも相変わらず、大変そうだな。
「それに、ワタル君の抱き心地も好きだしね。」
俺は抱き枕ですか？
「それはカナシで間に合ってるわ。」
そう言って、ニッコリと笑うロップルさん・・・冗談ですよね？
「さぁ、どうかし」
「冗談に決まってんだろ！」
カナシがツッコミを入れる。さすがに限界か？
「元から限界。」
そうか。さて、そろそろ離れてくれませんか、ロップルさん？今日は、ロップルさんに大事な話があって来たんです。
「あら、私に？告白でもされちゃうのかしら？」
しません！

「それで、話って何かしら？」
リビングに通された俺は、今、ロップルさんの正面に座っている。カナシは俺とロップルさんに茶を注ぐと、俺の横にドッカリと座った。
「ロップルさん、野球チームの話はご存知ですよね？」
「えぇ、勿論。確か、選手が全員揃ったのよね？」
おや、そこまでご存知とは。
「何かと話題だからね。商店街に行けば、一通りの情報は集まるわ。

」
あそこの情報網は強力そうだ。さて、
「本題に入りましょう。実は今日、カナシが応援団の太鼓係に決定しました。」
「まぁ、そうなの！？」
ロップルさんは、一気に目を輝かせ始めた。
「そうかそうか。父さんの跡を継ぐ決意をしたんだ。よし、今日は一緒に寝てあげる！」
「全力で拒否！ていうか、それいつもしようとしてるじゃん！」
特別でもなんでもなく、口実が欲しいだけだな。
「で・・・それが私にどう関係してくるの？」
「そこで、ロップルさんに応援団長を頼みたいんです。」
「私に？」
ロップルさんはお茶を飲む手を止め、驚いた目で俺を見てきた。
「私で、大丈夫かしら？」
「ロップルさんなら、お任せできると信じています。」
俺がそう言うと、ロップルさんはカナシの方を見た。
「カナシは、私が応援団長でいいの？」
「・・・姉ちゃんなら、できると思うよ・・・」
カナシはそっぽを向きながら、そう呟いた。なに照れてやがる。
「カナシのお許しもいただいたことだし・・・うん、応援団長、やらせてもらうわ。」
「ありがとうございます。」
俺が頭を下げると、ロップルさんはフフッと笑った。
「あのやんちゃ坊主だったワタル君が、今じゃ丁寧な言葉で頼みごとができるようになっちゃったわね。」
やんちゃ坊主って・・・ロップルさんに唆されたんですよ、けっこう。
「あら、そうだった？」
とぼけないでくださいよ。俺だけじゃなく、クラスの男子の八割

は唆されました。
「どうしても、乗ってこない子もいたけどね。スライとか。」
スライは、興味ないことにはホント、ヤル気出しませんからね。
でも、今回はスライも乗ってくれるでしょう。
「でしょうね・・・さて、ワタル君。」
「はい？」
「応援団長は引き受けるけど、一つだけ、条件つけてもいいかしら？」
条件？俺は首を捻った。ロップルさんがそんなことを言うのは、かなり珍しい。
「私とカナシの衣装だけ、私達の自由にさせてもらえないかしら？」
衣装ですか？構いませんが、またどうして？
「それは、当日までのお楽しみってことで。」
そう言って、ロップルさんは俺にウィンクを返した。お楽しみ、ですか・・・
「分かりました。それについては、一任しましょう。」
「ありがと。」
やたらと嬉しそうなロップルさん。ひょっとすると俺は、カナシにまた迷惑をかける決断をしたかも知れない・・・

カナシの家を出た俺は、その足で警察署へと赴いた。球場の所有権、誰のものなのかはっきりさせないとな。
「でも、警察署って妙に緊張すんだよな・・・」
特にやましい事があるわけじゃないけど、何かとピリピリした雰囲気があるよな。
「ま、気にしててもしゃーねーか。」
俺は軽く深呼吸をすると、警察署の扉を開けた。
警察署は、この島では数少ない、コンクリートの建物だ。全五階建て。一番上が、キールさんのいる署長室だ。すぐ裏には、警察隊と言われる、いわゆる警察の特殊部隊みたいな人達が待機している、

三階建ての別棟がある。警察隊は、今は全部で八小隊まであったはずだな・・・常時、どこか一隊は待機しているらしい。キールさんは、警察署長であると同時に、警察隊総合隊長。
　さて、今日はそのキールさんに用があって来たんだけど・・・いるかな？いきなり署長室に行くのも悪いと思い、俺は一階の受付で、キールさんの所在を確認してもらうようお願いした。
「キール署長の、ですか？失礼ですが、お名前は？」
「クリョホーセン・ワタルです。」
「！？」
　俺の名前を出した途端、受付の警察官の表情が変わる。そして勢いよく立ち上がり、
「これは失礼しました！すぐ、確認してまいります！」
　俺にそう言って敬礼をし、大急ぎで署長室の方に走っていった。この国じゃ、警察官よりも、俺みたいな兵士の方が立場は上だ。しかも、王族の専属近衛兵ともなれば、だいたい名前を出すとこうなる。でも俺、まだ研修の身なんだけどな・・・

　待つこと数分。現れたのはキールさんではなく、警察の制服に身を包んだ女性だった。
「副署長のカエサルです。キール署長は所用でお出になられておりますので、私が代わりにご用件をお聞きいたします。」
　キールさんはいないのか・・・ま、代わりに話を聞いてくれるって言うんなら、お言葉に甘えるとしよう。
　俺はカエサルさんに、球場の土地権利の所有者を調べて欲しい旨を伝えた。カエサルさんは、俺が話を終えるとすぐ、近くにいた警察官に、資料を持ってくるよう伝えた。その間、カエサルさんは俺に尋ねてきた。
「それにしても、なぜ、王女の専属近衛兵であるあなたが、球場の土地権利をお調べに？」
　ご存知ありませんか？女子野球チーム発足の話。

「女子野球・・・そういえば、キール署長がそのような話をしておりました。」
「この町で球場と言えば、一つしかありませんからね。ですが、もうずい分と使われていません。修繕や整備をしなきゃ、使い物にはならない。」
「が、それをするためには、地権者と交渉をする必要があると？」
ご明察。勝手にやっちゃうと、警察よりも役所がうるさいですから。
「なるほど。」
ちょうど会話の区切りがついた時、さっきの警察官が小走りに戻ってきた。
「副署長、権利書を発見いたしました。」
「ご苦労。お前は持ち場に戻っていい。後は私が。」
「はっ！」
警察官は敬礼をすると、踵を返して持ち場に戻っていった。
「では、こちらへ。」
そう言って、カエサルさんは先に歩き出す。俺は無言で、後を付いていった。
少し歩き、通されたのは副署長室だった。署長室と同じフロアにあったのか・・・真反対だから気づかなかった。
「ここならば、私以外はめったに入ることはありません。本来、土地の権利書は、我々警察の人間しか、自由に閲覧することは出来ません。いかに、あなたが王族専属近衛兵であっても、警察官の立ち会いが必要です。ご了承ください。」
承知していますよ。では、見せていただいても？
「えぇ、どうぞ。」
俺はカエサルさんから権利書を受け取ると、早速それに目を通した。ふむ・・・相変わらず、こういう書類は細かい字が多い。もうちょっと、簡単な書き方とか出来ないか？
「土地の権利者は・・・マルク・ゴンザレス・・・」

住所は・・・球場のすぐ傍か。
「でも、土地の権利者と球場の所有者は一緒なのか？・・・」
「普通、建物を建てた人間が、その土地の所有者となります。もっとも、ご存命であればの話ですが。」
あぁ、そっか。死んでる場合もあるんだっけ。その場合、普通はどうなります？
「わが国の法においては、親族に権利が移譲されます。仮に、血縁の方がいらっしゃらなかった場合は、国有地となります。」
国有地か・・・それはそれでめんどくさそうだ。このゴンザレスさんが、今も元気であることを祈ろう。さて、住所は記憶したし、後は話をつけるだけだ。
「ありがとうございました、カエサルさん。あとは、僕の方で話をつけます。」
「はい。署長は、女子野球チームにかなり期待されておりました。どうか、頑張ってください。我々でお力添えできることでしたら、何なりと仰ってください。」
その時が来たら、頼りにさせてもらいます。それじゃ、僕はこれで。キールさんが帰ってきたら、よろしくお伝えください。
「はい、承知しました。」
俺はカエサルさんに敬礼を返し、警察署を後にした。

警察署を出て数分。俺は、ファンクの家である『アクセル土木店』に来ていた。ファンクに、土地のことを話さないといけねーからな。
「ちゃーっす。ファンク、いるかー？」
「あいよー。」
店の奥の方から、ファンクのやや間延びした声が聞こえた。ファンク以外の人の気配がない。どこかで家でも建ててるのか？
「よう、ワタル。例の話か？」
あぁ。ところで、お前以外の人は？
「親父達なら、朝から仕事だ。夜まで帰ってこねーよ。」

そうか。じゃ、土地の話はお前から伝えといてくれや。
「そのつもりだ。で、どうだった？」
俺はファンクに、土地の所有者とその住所を教えた。
「りょーかい。にしてもお前、仕事速いな。」
「時間がそんなにないからな。そっちも、なるべく早く頼むぜ。週末までに、せめて、グラウンドとベンチぐらいは、使えるようにしとかないとな。」
「努力するよ。」
さて、話は終わり。俺はこれから、スコアラー探しの旅に出るよ。
「あいよ・・・そういや、ミズホとかはなにしてんだ？」
「え？」
そういや、なにやってんだろうな？選手は一応揃ったわけだし、家で宿題でもやってんじゃねーの？それか、遊びまわってるか・・・
「あいつらがスコアラー捜してたりは、しねーのか？」
どうだろうな。誰かが気づいて、やっていてくれたりすると、なにかとありがたいんだけどな。
「じゃ、俺は行くぜ。あと、よろしくな。」
「おう、サンキューな。」
俺はファンクに手を振り、店を後にした。それにしても、確かにミズホやマリアとかは、選手が揃った今、どこでなにをしているんだろうか？まぁ、島の中を適当に歩いてりゃ、誰かには会うかも知れないな。さて・・・
「当てのない旅へ、赴くとしますか。」
俺はそんなことを呟いて、とりあえず、右の道を歩き出した。

道なりに歩き出して、どれくらい経っただろう。少し、日が西に傾き始めた。歩いている間、俺はずっと、スコアラーをやってくれそうな人を考えていた。が、どうにもこうにも、いい人がいない。スコアラーは、試合の経過を記録するだけが仕事じゃない。相手チームの情報を分析したり、自分のチームのデータを日々記録したり、

チームの新戦力の発掘までするスコアラーもいるらしい。
「そこまで出来なくてもいいけど・・・」
せめて、相手チームの戦力分析が出来ないと、戦いようがないしな。野球は、ただの体力勝負だけじゃない。情報戦、頭脳戦も重要になってくる。
「分析力と根気・・・それが最も重要な資質・・・」
俺の独断と偏見で言うなら、の話ではあるが・・・
そんなことを考えながら歩いていると、ツーンと、消毒薬の匂いがしてきた。ふと横を見ると、メルアの病院があった。いつの間にか、こんなとこまで歩いてきていたのか。そういや、アリスさんがまだ入院しているんだよな。
「ちょっくら、顔を見せていくか。」
俺はそう言うと、病院に足を踏み入れた。
病院の中は、いつものように人が入り乱れていた。メルアが個人で開いている病院で、法律的には診療所になる。でも、あいつ一人でかなりの分野をやっているからな・・・
「もう一人二人、医者がいればな。」
祭りの時に久しぶりに会ったけど、以前より痩せているように見えた。疲れている所を見せようとしないからな、あいつは。けっこう無理しているに違いない。
「さて、アリスさんの病室は・・・」
俺は入院患者のいるフロアの廊下を歩きながら、視線を右へ左へと移す。そして、その廊下のちょうど真ん中辺りにある扉の横に、『アリス・ランフォード』の表札を見つけた。俺が扉をノックすると、
「はい？」
アリスさんの声がした。
「ワタルです。今、大丈夫ですか？」
「あ、はい。どうぞ。」
俺は扉を開け、アリスさんの病室へと入った。

アリスさんは、ベッドの上から俺を見ていた。見たところ、だいぶ顔色も良くなってきている。
「どうです？体調の方は？」
「お陰さまで、だいぶ良くなりました。メルアさんの話では、今週中には退院できるそうです。」
そりゃ良かった。で、アリスさんの今後のことなんですが、聞いていますよね？
「あ、はい。ですが、本当に宜しいのでしょうか？王女様のお邸に住まわせていただいても・・・」
姫が了承されたことです。それに、この島で一番安全な場所は、なんだかんだ言って姫の邸です。俺が保証します。
「そうですか・・・本当に、何から何まで、ありがとうございます。」
そう言って、アリスさんは深々と頭を下げた。いえ、気にしないでください。それに、姫も喜ばれるでしょう。
「え？」
「姫は、まだ異国を旅されたことがないんです。アリスさんの国の話が聞けるのを、今か今かと心待ちにされているでしょうから。」
「そうですか。私の話でよければ、喜んで。」
そう言って、アリスさんは笑った。どうやら、気持ちの方もだいぶ落ち着いてきてるみたいだな。
「ところで、メルアは？」
「メルアさんなら、午前中に回診してくださった時から、見ていませんけど？」
そうですか。んじゃ、今は外来かな？仕事の邪魔するのも悪いし、俺はそろそろ帰りますよ。
「・・・帰っちゃうんですか？」
途端、寂しそうな声を出すアリスさん。すみませんが、野球チームの関係で、終わっていない仕事があるもんですから。
「そうですか・・・では、仕方ありませんね。」

「それじゃ、お大事に。」
俺はそれだけ言って、病室を後にした。元気そうで良かった・・・
それにしても、キールさんは厳重だな。病院の外から中から、あの部屋をバッチリ監視している。感じただけで五人・・・ってところか。こりゃ、看護士さんの中にも、何人か紛れ込ませているな。用意周到なこった。ま、それが分かっただけでも安心だな。
「さて、道草くっちまったな。」
さっさと、スコアラーを捜し・・・ん？
「あの人・・・どっかで・・・」
俺の目に飛び込んできたのは、花束を抱えている一人の女性だった。背は俺よりもだいぶ低い。大きな麦藁帽子を被っていて、受付でなにやら看護士さんと話しをしている。その帽子と横顔に、俺はなんとなく見覚えがあった。でも・・・
「誰だっけ・・・？」
記憶が曖昧で、ハッキリと思い出せない。でも、どこかで会ったことがあるのは確かだ。
「どこだっけな？・・・」
ここまでうろ覚えってことは、何年も前の話か？そんなことを考えながら、彼女の横顔をジッと見ていた時だった。
「？」
不意に、彼女がこっちを向いた。反応が一瞬遅れ、彼女と目が合った。そして彼女は俺に気づき、少しだけ驚いたような顔をした。そしてその目を見た瞬間、俺は彼女が誰だったかを思い出した。
「あれ？ワタルさんじゃないですか。」
彼女は俺の名を呼び、こっちへ駆けて来る。その声、その動き・・・俺は、なんで忘れていたんだろうか・・・
「お久しぶりです。」
「お久しぶりです。」
彼女の名は、マクセノ・フランチェスカ。俺の師匠の妹さんであり、初恋の人だった。

病院へ知人の見舞いに来ていたフランチェスカさんと、俺は今、病院からの帰り道を共にしている。会うのは、何年ぶりですかね？
「兄がこの島を出た時ですから・・・もう、四年になりますね。」
四年か・・・師匠が島を出てから、もうそんなになるのか・・・師匠から、何か連絡とかは？
「半年ほど前に、手紙が来ました。今は世界の東側を旅しているようです。」
東側、か・・・ミズホの住んでいたイーハンも、確か東側だったな。ま、元気そうでなによりだ。
「兄は、ワタルさんのことを心配していました。ワタルさんは、兄の唯一のお弟子さんですから。」
そうですか、師匠が・・・今度、元気だとでも手紙に書いておいてください。自分は、根っからの筆不精なんで。
「はい、分かりました。ところで、ワタルさんはなぜあの病院に？どこか、お体の具合でも悪いんですか？」
俺は軽く首を振った。
「あの病院に、知り合いが入院していましてね。用事のついでに、ちょっと寄っていたんですよ。」
「そうなんですか。」
そこで会話が途切れると、俺もフランチェスカさんも黙ってしまった。元々、彼女はそんなにお喋りな人でもない。でも、彼女との会話は、なんだか心地がいい。
それにしても、師匠が旅立ってからもう四年か・・・俺の初恋の人は、四年経った今、ますます綺麗になっていた。歳は一つ上だけど、身長はマリアより少し大きい程度。顔立ちも幼い人で、いつも頬がリンゴのように紅い。真面目で家庭的な性格をしていて、俺達後輩からは勿論のこと、先輩や先生達の信頼も厚かった。
そしてフランチェスカさんは、師匠の数少ない弱点でもあった。少なくとも、師匠に口で勝てるのは、フランチェスカさんぐらいに

なってしまったと思う。他人を言葉でコントロールするその術は、ロップルさん以上のものがある。
「そういえば、ワタルさん？」
「なんですか？」
「噂に聞いたんですが、野球チームを作ったんですか？」
フランチェスカさんが、俺の顔を少し覗き込みながらそう聞いてきた。
「作りましたけど・・・どこからその話を？」
「商店街の方々から、ですけど？」
また商店街か・・・あそこの情報網、マジですごいな・・・まぁ、ウチのクラスの誰かが、俺達の情報を流してんだろうけど。
「すごいですね。自分達で、一から何でも始めるなんて。」
「そういう状況でしたから。」
「だとしたら、もっとすごいです。私なら、すぐに諦めちゃいそう。」
よく言うよ。フランチェスカさんだって、そりゃ相当な頑張り屋だ。
「フランチェスカさんも、野球に興味があるんですか？」
「あまり、詳しくはありませんが・・・でも、精一杯応援させていただきます。」
ありがとうございます。その期待に応えるためにも、頑張りますよ。
「チームは、もう練習とかされているんですか？」
「人数は揃っているんですが・・・」
俺は、道具や球場といった環境面が整っていないことや、チームの裏方がまだ完全でないことを話した。
「特に急務となっているのが、スコアラーなんです。スコアラーがいないことには、エントリーも出来ないし、試合にも出られません。」
「そ、それって、かなり大変じゃないですか！？」

慌てだすフランチェスカさん。いや、本来なら、俺がこんな状態のはずなんだ。ただ、あんまり表立って騒ぎたくないからな。
「誰か、当てはいるんですか？」
「それがまったく・・・みんなには、俺が捜すって言っちゃったんですが・・・」
半分勢いだったな、今思えば・・・最悪、スライあたりにやらせるか・・・
「あの、ワタルさん・・・そのスコアラー、私にやらせてくれませんか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？・・・・・・・・・」
フランチェスカさん、今、なんと？
「ですから、私に、スコアラーをやらせてくれませんか？」
スコアラーを？・・・・
「いいんですか？・・・・」
「はい、ご迷惑でなければ・・・」
「迷惑だなんて、とんでもありません！ありがとうございます！」
俺はフランチェスカさんの手をガッシリと掴むと、大声でお礼を言っていた。
「でも、どうして急に？」
「だって、ワタルさんが困っていたから・・・ワタルさんは、弟のような存在ですから。弟が困っていたら、助けるのは当然です。」
そう言って、フランチェスカさんはニコッと笑った。昔は、俺の上から見せてくれたその笑顔を、今、俺の下から向けてくれている。昔、師匠の修行が辛くて、何度も逃げ出した。でもその度に、この笑顔が俺に勇気をくれた。
「では、よろしくお願いします、お姉ちゃん。」
「はい、お姉ちゃんに任せなさい。」
そう言い合った後、俺とフランチェスカさんは、思わず笑い出した。

翌日。登校するなり、ミズホが俺の所へ飛んできた。
「ワタル！大変よ！スコアラーがいないわ！このままじゃエントリーできないじゃない！？」
やっぱり、昨日一日忘れてやがったな・・・
「今から捜して見つかるかしら・・・でも、見つけなきゃエントリーできないし、やるしかないわね。」
決意を固めた所悪いが、スコアラーはもういるぞ。
「え？・・・」
ミズホは、拳を握ったままの体勢で、俺を見てきた。普段丸い目が、驚きでさらに丸くなっている。
「昨日、昔の知り合いに偶然会ってさ・・・事情を話したら、やらせてほしいって。もっとも、経験はないから、これから勉強していくわけだけど・・・でも、とりあえずいるにはいるんだ。」
「ほ、ほんと？・・・」
ミズホは、信じられないとでも言いたそうに、俺を見つめてくる。言っとくけど、気休めじゃないぞ。
「やるじゃない！これは立派なＭＶＰよ！」
テンションが一気に上がるミズホ。そりゃどうも。さて、他の男達はどうなんだか。
「ワタル。」
おう、ファンクか。どうだった？
「それが、権利者のマルク・ゴンザレスっていう人は、二年前に死んじまってて、今はあそこ、どうやら姫様の所有物っぽいぜ。」
姫の？
「あぁ。この島を管轄しているのは、なんだかんだ言って姫様だからな。つーわけで、修理するにゃ姫の許可がいるってわけだ。」
そうか・・・姫の土地とは・・・
「分かった。今日にでも邸に行って、姫と話をしてみるよ。」
「頼むぜ。」
「女子のみんな～！ちょっと聞いて～！」

ファンクとの話が一段落した直後、教壇の方からヘンダーソンの声が聞こえてきた。女子が何事かと、ヘンダーソンの周りに集まる。
「チームのユニフォーム作るのに、みんなでデザインを考えてほしいんだ。期限は今週中でよろしく。この紙に書いて、僕の所へ持ってきて。」
『はーい。』
女子の気の合った返事を聞くと、ヘンダーソンは紙を配り始めた。昨日家に帰ってから、ずっとこれをやっていたな？
「女子のみんな。そっちが終わったら、今度はこっちに。」
今度はスライか。
「スパイク作るのに、とりあえず、足のサイズを知りたい。自分の名前の横に、足のサイズを書いといてほしいんだ。書けたら、俺の机の上に置いといて。」
『はーい。』
女子が紙に鉛筆を走らせているのを見ると、スライがこっちにやって来た。どうした？
「クラスの奴からグローブを集めたんだが・・・とりあえず、ほとんどが外野手用と二遊間用だ。ファースト、サード、キャッチャー、ピッチャー用は皆無だ。」
「マジか・・・ミズホやマリさんは、自分の分を持っていそうだな。」
「あ、そうか・・・よし、今度は女子からも集めてみる。あと、それ以外の道具なんだが、調達先の目処はついた。後は金だ。」
金・・・
「やっぱ、みんなから集めるしかないな・・・」
「でも、スパイク代にユニフォーム代、加えて道具代までか？相当な金になるぞ？」
確かに、かなりの物が必要なだけに、金額も相当なもんだ・・・
「よし、道具はなるべく、タダで集められそうな所を捜してくれ。あとは、お前の値切り術に期待している。」

「分かった。やるだけやってみる。」
スライの目に力が入った。よし、やる気にさせれば、こいつはとことんまでやってくれる。スライはそう言った直後、女子を再び集め、なにやら話している。おそらく、道具の話だな。
「ヘンダーソン。」
俺はヘンダーソンを呼んだ。ヘンダーソンは、小走りに俺の前にやって来た。
「どうしたの？」
「悪いな、ユニフォームのこと。」
「もう、今さらだよ。僕に任せたの、ワタルじゃない。」
そうなんだけどな・・・クラスの奴以外の案は、どうするんだ？
「あ、それは大丈夫。昨日の内に、他の人の家には回ったから。」
仕事が速いな。助かるよ。
「で、ユニフォームで一つだけ注文があってな。」
「注文？あぁ、ロップルさんとカナシ君のユニフォームだけ別に、ってやつでしょ？」
そこまで知っていたか。
「今朝、カナシ君から聞いたんだ。まぁ、ロップルさんらしいよね。」
そう言って、ヘンダーソンはクスクスと笑った。カナシにチラッと目をやると、いつもより不機嫌そうな目で外を見ていた。

その日の放課後。俺は姫の邸へと赴いた。なんだか最近、チームのことで困ったことがあると、何かと姫の邸に行っている気がするな・・・姫はお優しいから、俺がついついそれに甘えてしまっているのかもな・・・
「お、ワタル。来たのか。」
邸に着くと、外を見回っていたのか、近衛兵姿のユンナさんに出会った。姫は？
「自室にいらっしゃる。早く行ってやれ。」

そのつもりですよ。俺は近衛兵の姿に着替えると、足早に姫の部屋を目指した。
『コンコン』
姫の部屋の扉をノックする。扉が開き、姫が姿を現した。
「あ、ワタル！来てくれたのですね！」
姫の顔が、一気に真珠のように明るくなる。
「あ、ワタルさん。ご無沙汰しております。」
部屋の中には、リンスさんもいた。お久しぶりです。
「ワタル、アリスはまだ来ないのですか？」
「先日訪ねましたら、数日中に退院できるとのことでした。アリスも、姫とお会いできることを楽しみにしておりました。」
「そうですか。早く、異国の話を聞きたいです。」
姫の瞳は、すでに期待満点で輝いている。さて、アリスさんの話でどこまで満足されることやら。ご先祖のトレジャーハントの話とか、かなり喜びそうだ。
「ワタルさんが来られたということは、今日もチームのことで何かお困りごとですか？」
リンスさんはそう言いながら、俺に紅茶を淹れてくれた。お見通しですか？
「ここ最近、何かとそうですから。それで、この度はどのようなお困りごとで？」
俺はリンスさんから紅茶を受け取ると、砂糖を一さじ入れて、軽く混ぜてから一口含む。いつもより味が深いな。
「今回のお困りごとは、球場のことです。リンスさんが所属していた、ラルック・レイナーズの本拠地。」
「町外れの、レイナースタジアムですね。懐かしいですわ。」
レイナースタジアムって言うのか・・・初めて知ったな。
「その球場の修繕をして、新チームの本拠地としようと思ったのですが・・・その過程で問題が・・・」
「どのような問題なのですか？」

姫が、横から顔を覗き込みながら聞いてくる。
「実は、その球場の管理者の方がお亡くなりになっておりまして・・・親族の方もおられないようで、今は姫の管轄となっております。」
「私の？」
どうやら、姫も把握されていなかったようだ。
「はい。ですので、修繕には姫の許可が必要なのです。」
「そうですか。分かりました。修繕の許可書を、すぐに手配しましょう。リンス、お願いできますか？」
「承知いたしました。すぐに手配いたします。」
リンスさんは姫に一礼すると、そそくさと部屋を出て行った。
「ワタル、その修繕もあなた達が？」
「私の友達の家が、大工をやっております。そこの方々が中心となります。無論、我々も出来る限りの手伝いをすると思いますが。」
「そうですか。では、後でその方の名前を教えてください。書類には、許可を出す相手の名前が必要でしょうから。」
「承知いたしました。」
さて、これで球場の問題はほぼ片付いたな。後は道具と金だ。
「・・・やはり、ワタルはすごいですね。チームのこと、学業のこと、私のことと、様々な問題を一人でしっかりこなしています。」
「そんな・・・一人ではありません。」
チームのことは、クラスのみんなが頑張ってくれているし、学業もまた然り。友達の世話になってばかりだ。姫のことだって、俺一人だけじゃなく、ユンナさんもいる。
「仲間がいなければ・・・とてもできる事ではなかったでしょう。」
「そうですか・・・良い仲間に、恵まれているのですね。」
「えぇ、本当にいい仲間です。」
昔は、時々喧嘩もしたけどな・・・
「一度、クラスの皆さんと、ゆっくりお会いしたいですね。」
姫が窓の外を見ながらそう言った。姫がお望みとあれば、私からお伝えしておきますが？

「・・・では、ワタル。一つ、頼まれていただけますか？」
「はい、なんなりと。」
「チームの練習初日、私に練習を視察させてください。ワタルとその友人が頑張った結果を、私の目で確かめたいのです。」
姫はそう言って、ニッコリと笑われた。俺は姫の前に畏まり、
「承知いたしました。」
いつもより真剣みを増した口調で、そう言った。

「ここが、レイナースタジアム・・・思っていた以上に、本格的ね。」
外壁を見上げながら、ミズホはそう言った。ファンクの親父さんが本気を出してくれたおかげで、僅か一週間で修繕は完了した。土日は俺達も手伝いに入り、グラウンドの草むしりや観客席の整備など、それはそれはこき使われた・・・ホント、ファンクの親父さん、容赦なし。
「ほらほら、なに突っ立ってんの？早速、グラウンドを見に行ってみようよ。」
そう言って先頭に立ったのが、我らが監督、ニールセン・ニルヤさんだった。三十半ばとは思えない若々しい外見と、少年のような無邪気さを持った人だ。監督の話を持っていった時も、笑いながら二つ返事でＯＫしてくれた。
俺達はニルヤさんを先頭に、ベンチからグラウンドを見渡した。
『わぁ～・・・』
何人かの声が重なった。太陽に照らされたグラウンドは、内野の土と、外野の天然芝が見事に輝いていた。
「へぇ～、よくここまで整備されましたね。」
副監督を務めてくれるジーニス・アルフェノイドさんも、細い目で微笑みながらそう言った。
「本格的ね～。イーハンでも、ここまでのは中々・・・」
マリさんは土を触りながら、とても嬉しそうだった。

「今見てきたけど、ブルペンもバッチリ！」
ミズホ・・・いつの間に見に行ったんだ？
「さて・・・グラウンドのお披露目の次は、これだよ。」
そう言って、大きなダンボールを抱えたヘンダーソンがやって来た。お、そっちも間に合ったか。
「うん。仕立て屋さんに、かなり無理言ってね。」
後で礼を言いに行かなくちゃな。じゃ、お披露目だ。
「了解。」
ヘンダーソンがダンボールを開けると、中からは袋詰めにされた、ユニフォームが姿を現した。
「みんなの体に合わせてオーダーメイドされているから、他の人と間違えないようにしてね。」
「よーし！それじゃ早速着替えてくるわ！」
そう言って、ミズホは自分のユニフォームをかっぱらうと、一目散に更衣室めがけて走っていった。他の女子もドンドンそれに続き、男だけが取り残される形になった。
「よし、じゃあ俺達も！」
「ニルヤ・・・後でい・い・だ・ろ？」
「・・・もちろん・・・」
ニルヤさんを止めるジーニスさんの目・・・怖・・・
数分後。着替えを終えたミズホ達が戻ってきた。全体的に赤を基調とした、シンプルなデザインのユニフォーム。胸元には、チーム名がプリントされている。
「どう、ワタル君？」
「よく似合ってるよ。」
俺がそう言うと、マリアはユニフォーム以上に顔を紅くした。いまさら、照れることでもないだろ？
「いやー、壮観壮観。」
「皆さん、とてもよくお似合いですよ。」
いつの間にかユニフォームに着替えたニルヤさんとジーニスさん

が、笑顔でベンチから顔を出した。お二人も、よくお似合いですよ。
「ありがとうございます、ワタル君。」
「・・・さて、いよいよチームの始動だ。」
ニルヤさんの目つきが変わった。瞬間、俺達の間にも緊張が走り、一瞬にして静まり返った。
「まずは、自己紹介といこう。俺が、監督を任されたニールセン・ニルヤだ。」
「副監督を任されました、ジーニス・アルフェノイドです。」
「知っている人もいるかも知れないけど、俺は元プロ野球の選手だ。ポジションは外野。現役を退いて久しい今、再び野球に携われることを嬉しく思う。そして、ここに集っている人間全員が、世界一を本気で目指していると信じている。」
ニルヤさんはそこで一呼吸置くと、少し声に力を入れて続けた。
「だから、俺は練習でも試合でも、俺の本気を貫かせてもらう。みんなが勝ちたいと言うのなら、世界を獲りたいと思っているのなら、俺もその気持ちは同じだ。目指すぞ！世界一！」
『おーう！！』
声が揃う女子たち。さすがニルヤさん、人を乗せるのが上手い。
「さて、気分も高まった所で、他のスタッフの自己紹介といこうか？それじゃ、フランチェスカから。」
「あ、はい。」
フランチェスカさんは、持っていたスコアブックをギュッと握ると、緊張した笑顔で自己紹介を始めた。
「この度、スコアラーをさせて頂くことになりました、マクセノ・フランチェスカと申します。慣れぬことゆえ、皆さんにご迷惑をおかけすることもあるやも知れませんが、精一杯頑張らせていただきますので、どうかよろしくお願いいたします。」
なんか、社交辞令のマニュアルに載っていそうなくらい、丁寧な挨拶だな。フランチェスカさんらしいけど。
「メルバ診療所より派遣されました、当球団専属看護師、ステファ

ニー・ノーランザと申します。怪我をされました際は、遠慮なく仰ってください。」
そう言って、ステファニーさんはニッコリ微笑んだ。年齢は、サンディより少し上くらいかな？大きく丸いメガネが特徴的だ。
「応援団長担当、ロップル・コールドウェイよ。太鼓係は、我が弟のカナシ。私達姉弟で、バッチリ盛り上げさせてもらうわ。」
気合十分のロップルさん。対してカナシは、いつもより三割増しくらいでムスッとしている。二人のユニフォームはまだ出来上がってないらしく、今日は私服での参加だ。
「さて・・・次はワタルの出番かな？」
俺はニルヤさんにそう促されると、みんなの前に立って話を始めた。
「実は今日、ちょっとスペシャルゲストが来られていてな・・・俺達の練習を、是非とも視察されたいと熱望されているんだ。」
「遠回しにしては、そのゲストに失礼ではないのか、ワタル君？」
フローラが、不敵な笑みを携えながらそう言った。そう言うってことは、お前にはそのゲストが誰だか分かったってことか？
「いかにも。君の口調で、すぐに察しがついたよ。」
やれやれ、俺もまだまだだな・・・
「では、ご登場願いましょう・・・どうぞこちらへ。」
俺がベンチの奥に向かってそう叫ぶと、近衛姿のユンナさんを従え、アイル姫が姿を現した。途端、慌しく姫の前に畏まるミズホ達。
「皆さん、どうぞお顔を上げてください。」
みんなを前にした姫の第一声は、いつものお言葉だった。
「姫がこう仰っておられる。みんな、いつも通りにしてくれ。」
俺がそう言うと、ようやく数人が顔を上げ始めた。そして全員が恐る恐る立ち上がると、姫はまた話し始めた。
「ミズホとリンスとアリス以外の方は、初めましてですね。私は、ステークランデル共和国第一皇女、グレッグ・アイルです。本日、こうして皆さんと出会えたこと、たいへん光栄に思います。本日は、

ワタルに無理を言って、皆さんの練習を拝見させていただきに参りました。どうか、よろしくお願いいたします。」
そう言うと、姫はお手本のような礼と微笑みを向けられた。
「姫、お会いできて光栄にございます。」
ニルヤさんが、場の空気を察知して、スッと姫の前に出てきて挨拶をした。
「当チームの監督を務めることになりました、ニールセン・ニルヤと申します。本日は存分に、練習をご覧になってください。」
「ありがとうございます、ニールセン監督。ですが、私の前だからといって、練習に加減や遠慮はしないでください。あくまで、いつもの皆さんでいてください。」
「お心遣い、痛み入ります。」
ニルヤさんはそのままゆっくり立ち上がると、クルッとミズホ達に向き直り、こう言った。
「さて、こうしてチームの門出をめでたく迎えられたわけだ。これから開幕に向けて、猛練習を重ねることになる。その記念すべき第一歩目は・・・体力測定だ～！」
思いっきりの笑顔でそう叫んだニルヤさん。って、体力測定？
「あぁ。野球をするんだったら、それも世界一を目指すんだったら、それ相応の技術が必要だ。でも、その技術を習得するためには、体が運動できる基礎を固めなくちゃいけない。というわけで、しばらくは技術的なことは控えめで、基礎体力の向上を目指す練習を重点的に行う。全員、それに異論はないかな？」
『はい！』
どうやら、ミズホ達はそのことに異論はないらしい。まぁ、俺もニルヤさんの言っていることに賛成だ。師匠から剣を習う時も、技術よりは体力強化が最初は優先だった。
「じゃ、まずは準備運動とストレッチだ。まずは、体をしっかり温めておかないとね。」
ニルヤさんはそう言うと、傍らにあったカバンの中を漁り始めた。

そして取り出したのは・・・
「これは、ラジオですか？」
フローラが、その黒い長方形を見つめながら、ニルヤさんにそう尋ねた。
「正解。プロの時に、イーハンのとある店で買ってね。ミズホやマリは、見たことあるだろ？」
「えぇ、そりゃ勿論。」
「一家に一台は、多分あるんじゃないかしら？」
ミズホもマリさんも、さも知っていて当然のように言った。が、俺達にしてみれば、まだラジオは、そんなに普及しているものじゃない。技術力なら、ケルムナにも勝ると評されるイーハン。このラジオは、その象徴とも呼べる物だ。俺達の身の回りじゃ、定食屋ぐらいにしかない。
「でも、これから準備体操するんでしょ？なんでラジオ出したの？」
マリアが、ラジオをツンツン突っつきながら、ニルヤさんに尋ねた。
「それは、準備体操と言えばこれだからさ！」
ニルヤさんが勢いよくボタンを押すと、軽快なピアノに乗せて、なにやら曲が流れ始めた。その曲の出だしを聞くなり、
『懐かしい・・・』
ミズホとマリさんは、声を揃えて感慨に耽った。あの、これはいったい何なんですか、ニルヤさん？
「何って、イーハン名物、ラジオ体操に決まっているじゃないか。」
ニルヤさんは、満面の笑みでもって大真面目に答えた。ラジオ体操？
「え、知らないの？」
マリさんが、目を丸くしながら俺の方を振り向いた。聞いたこともないけど・・・
「イーハンじゃ、名物なんですか？」
「そりゃもう、老若男女、全イーハン人が知っていると言っても過

言じゃないわ。」
　どうやら、イーハンではかなり有名なものらしい。が、俺達ステークランデル人からすれば、まったくをもって初めて知るものだった。
「俺も、イーハンに渡ってから初めて知ったんだけど・・・まぁ、最初は面食らったね。こんな体操に何の意味があるのかってね・・・でも、やってみるとけっこう汗をかくし、何より全員でやることによって一体感が生まれる。腹の底から声を出せば、元気にもなるしね。」
　どうやら、ニルヤさんはこの体操がお気に入りのようだ。
「それにしても、ホントに懐かしいわね。夏休みは早起きして、近所の公園でやったっけ。」
「そうそう。毎日出席カードぶら下げて、全部溜まるとノートが貰えたりね。」
「あーそうそう！」
　ミズホとマリさんは、思い出を語って楽しそうにはしゃいでいる。で、これが準備体操の代わりですか？
「あぁそうさ。練習は必ず、このラジオ体操から始めるよ。じゃまず、経験者二人にお手本を見せてもらおうかな。」
「はい。」
「オッケー。」
　ミズホ達はそう言うと、そそくさと俺達の前へと出た。そして音楽に合わせ、実に息の合った『ラジオ体操』を見せてくれた。時間にして、ホントに数分ほど。が、その数分のラジオ体操の後、二人の額にはジンワリと汗がにじんでいた。
「んじゃ、次はみんなでやっていこう。ミズホ達の動きに合わせて、元気いっぱいね。」
『はい！』
　こうして、チーム全体によるラジオ体操講座が始まった。最初は中々動きも合わず、掛け声もずれ気味だった。その度に、ニルヤさ

んはやり直しを続けた。そして、それを繰り返すことついに数十回。
『5・6・・7・・8・・・』
最後の深呼吸の終わりまで、全ての動きがピッタリと一致した。
「よーし、全員揃ったね！んじゃ、いったん休憩。」
ニルヤさんがそう言うと、ミズホ達はその場に座り込んでしまった。誰しもが、肩で息をしている。普段は表情を崩さないスノウでさえ、疲労の色は隠せない。
「そんなに疲れるのか、マリア？」
俺は、近くでへばっていたマリアに声をかけた。
「これ・・・かなりキツイよ・・・ハァハァ・・・これを夏の間、毎朝なんて・・・イーハンって、すご・・・」
それだけ言うと、マリアはグラウンドにゴロンと寝転がった。あの体力バカのマリアがここまでへばるってことは、このラジオ体操、相当に負荷が掛かるんだろう。これがウォーミングアップだなんて、ニルヤさんは意外とスパルタか？
それからしばらく休憩の後、ダイヤモンド走や遠投、腹筋や腕立てなど、実に様々なテストが行われた。すべての項目が終わる頃には、日が傾き始めていた。

「みんな、お疲れ様。」
『お疲れ様でした！』
全テストが終わった後、ロッカールームで反省会が始まった。スライが調達してきたホワイトボードの前に、笑顔を浮かべたニルヤさんとジーニスさんが立っている。
「さて、今日が記念すべき練習初日となったわけだけど、ま、かなり疲れただろうね。でも、これでへばっている様じゃ、到底世界は狙えない。まず、それだけ断言させてもらうよ。」
ニルヤさんのその言葉で、僅かながらにあった和んだ空気は、あっさりと冷え込んでしまった。
「世界を相手にしたい。その気持ちと意気込みは素晴らしい。が、

今日のテストの結果を見る限りでは、君達のポテンシャルは、その気持ちを空回りさせるだけだと判明した。」
　体が心に付いていかない・・・俺も師匠と修行している時、それをよく感じた。
「では、どうするべきなのか・・・答えは簡単さ。ポテンシャルを上げればいい。気持ちに負けないくらい、強いポテンシャルを身につける。というわけで、今後の練習方針として、しばらくは基礎体力の底上げを中心に行うことにしたよ。平行して、戦略やルールについて学ぶ座学を行う。座学はジーニスが、体力トレーニングは俺の担当だ。」
　そうか、知識もいるんだっけか・・・マリアとかは勉強苦手だけど、大丈夫か？
「あと、平日の練習開始時間は午後三時半から、休日は朝九時からバッチリ動くよ。」
「座学の時間も込みで、ですか？」
　フローラの質問に、ジーニスさんが答えた。
「座学は、休日練習の午後からとなります。平日は、雨が降った場合などは座学を行うと思います。無論、居眠りは禁止ですよ。」
　笑顔で釘を刺すジーニスさん。目が笑ってないように見えたのは、俺だけだろうか？
「というわけだから・・・ワタル。」
「はい？」
　不意に、ニルヤさんが俺を呼んだ。
「すまないけど、フランチェスカにスコアラーの個人指導をつける余裕が、しばらくなさそうでね・・・頼めるかな？」
「俺でいいんですか？」
　そりゃまぁ、知識はありますけど。
「君が一番適任だと思うから、頼んでいるんじゃないか。」
「はぁ・・・まぁ、俺は構いませんけど。」
「んじゃ、よろしくね。」

こうして俺は、フランチェスカさんにスコアラーのやり方を教える役目を、よく分からないまま承諾してしまった。

「ごめんなさい、ワタルさん。なんだか、仕事を増やしてしまったみたいで・・・」

帰り道。フランチェスカさんは俺にそう言った。

「とんでもありません。スコアラーを頼んだのは俺ですから、むしろ当然ですよ。」

俺がそう言うと、フランチェスカさんは優しく微笑んだ。その微笑みに、俺は思わず心が高鳴った。やっぱり俺は、まだ心のどこかで、フランチェスカさんを好きなんだろうか？

まぁ、初恋の相手だし、ちゃんと告白もしてないし・・・未練はありそうだな、確実に。

「スコアラーって、やっぱり大切ですか？」

「そりゃもちろん。相手を知らなければ、チャンスは作れません。自分達を知らなければ、弱点は克服できません。スコアラーって、フィールドで戦う選手からも、その指示を出す監督からも信頼される、まさにチームの中心です。」

「そうですか・・・」

フランチェスカさんは、短くそう言うと、少しだけ俯いてしまった。どうやら、緊張させてしまったらしい。

「あーっと・・・フランチェスカさん？」

「はい？」

「その・・・俺もそんなに詳しいわけじゃないですけど・・・二人で頑張りましょう。」

「・・・はい！」

フランチェスカさんは少しだけ間を空けてから、いつもの笑顔で力強く頷いた。家に帰ったらスコアラーの本を捜そうと、俺はその笑顔を見ながら決めた。

第二話プロローグ

Base—Ball—Girl2

プロローグ

チーム発足以降、俺達の生活スタイルはガラッと変わった。平日の放課後、そして休日はとにかくスタジアムで練習。定期的に開かれるジーニスさんの講義で、様々な戦略について学び、また希望者に限ってだけど、俺がいつもこなしているトレーニングを共にする人もいる。男子も女子もシーズンオフということもあってか、昔のニルヤさんのプレイや試合をビデオで研究。寝ても覚めても野球漬けの日々。それが今の俺達だった。そのせいか、

「おはよう、ワタル君、ルアーニ君。」

「おう、マリアか。」

「おはようございます。」

俺達の登下校ランニングも、今じゃ島内の日常風景になっていた。最近じゃ面白がって、下級生なんかも付き合ってきたりする。タイミングさえ合えば、イルさんやポーラさん達でさえ合流する。

とまぁ、俺達のそんな地道な練習の成果は、少しずつだが現れ始めている。ヒーリルなんて、この前の体育の授業で六段の跳び箱を軽々と飛び越えた。あのヒーリルが、まさか六段を飛び越える日が来るなんて、俺達には夢のような瞬間だった。あまりのことにヒーリルは泣き出し、俺達は思わずあいつを胴上げしたくらいだ。

そして、そのように日々尽力しているのは選手だけじゃない。正直、見えない所で一番動き回っているのは、俺の横で涼しい顔して走っているルアーニ含めた裏方だろう。マグナはスライの家に入り浸って、教材になりそうな野球中継のテープを探しているし、ヘンダーソンは現在、仲良しこよしの妹と共同で、チームの横断幕を作成中だ。ロップルさんが団長を務める応援団は、いまやかなりの大所帯。休日には公園に集まり、カナシの太鼓に合わせて応援の練習

中だとか。おかげで最近、カナシの授業における居眠り率がハンパじゃない。
と、こういうのが最近の俺達の日常だ。正直な話、ミズホが来る前と今で、生活スタイルはまったく違うベクトルになったといっていい。が、少なくともこの現状、誰も文句は言っていない。それは、
「おーっはよう！」
ハイテンションなマリアの朝の挨拶に、
「おはよう、マリア！」
ミズホを筆頭に、クラスの全員が勢いよく挨拶を返してくることからも、容易に実感できることだ。忙しさの中にも、確実に俺達は充実した時間を過ごしている。そして、充実していると時間はあっという間で、気がつけば放課後に。そして、
「さて、今日もラジオ体操から、元気よく行こうか！」
『はい！！』
いつの間にかスタジアムに集合し、ニルヤさんの号令の下、ラジオ体操から始まる練習。
今じゃ島のちょっとしたブームだ。ウチの学校でさえ、体育の開始はこの体操からになったしな。それもこれも、全ては一番動き回っているミズホのおかげというか・・・
とにもかくにも、今、俺達は活気に満ち溢れている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6717f/

Base-Ball-Girl

2010年11月20日23時25分発行